女學

明治三十三年十月五日發兌

第貳百拾四號

同之社

女鑑第貳百拾四號

目録

稟告

從來本誌の發賣に係る事務は國光社雜誌部に於て取扱ひ居候處向後東京市京橋區木挽町貳丁目拾貳番地靜思館に於て取扱ひ候事に致候間自今國光及女鑑に關する御照會、御送金、御通知等は總て必靜思館宛にて御發信被成下度候也

追て編輯に關する件は從來の通り國光社編輯部宛にて御發信被成下度候

東京京橋區築地二丁目廿一番地
國光社編輯部

明治三十三年十月

東京京橋區木挽町二丁目十二番地
靜思館



冬物新着御披露
日本橋區通壹丁目
白木屋呉服店
洋服店
電話本局
四百七拾七
貳千百卅四

嚴島小浦の孝女

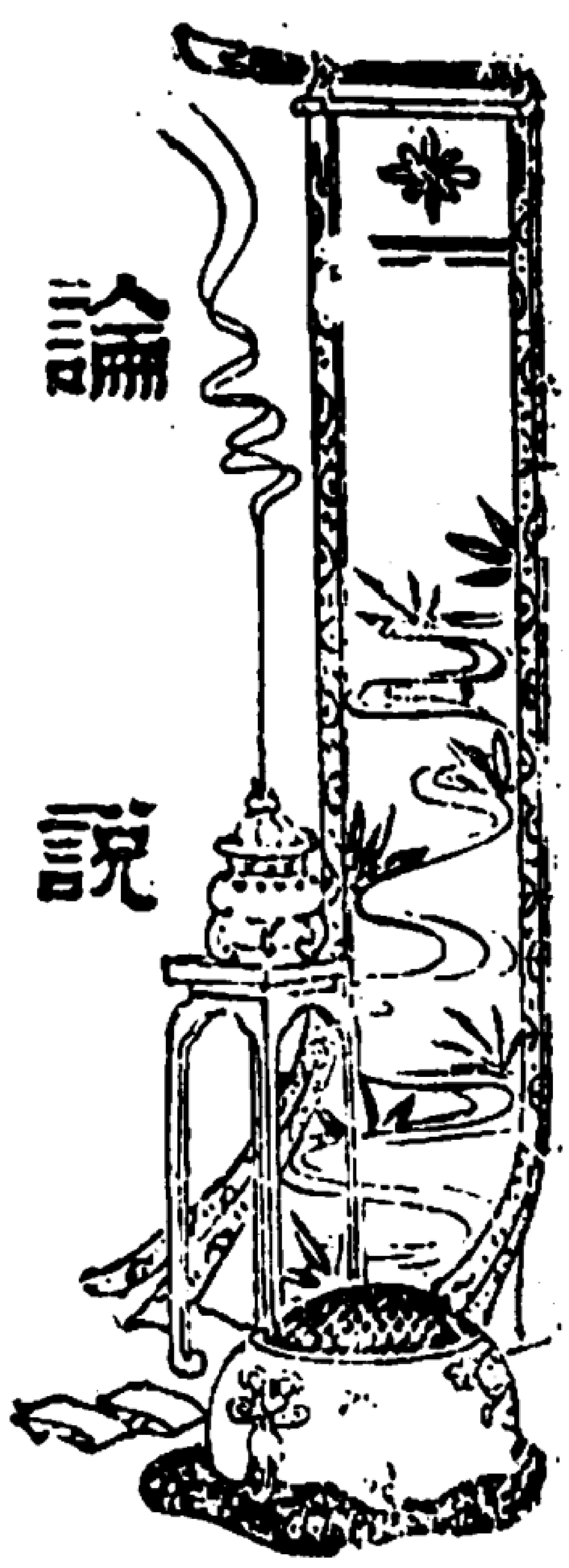


らしくせよといふ教訓に就きて

古より、人を教訓するにあたりて、らしくせよといふもの多し。即ち、人は人らしくせよ。女は女らしくせよ。小供は小供らしくせよ。或は以つて、男たり、女たり、小供たるに庶幾からむといふにあり。この說、俗耳に投じやすく、世人の注意を惹くこと多きを以つて碩學鴻儒を以つて目せらるゝ人々さへも、往々之を主張することあり。然りといへども、この說、いまだ、全く弊害なきと能はざるなり。勿論、人の人らしからざるものに比すれば、人らしきものゝ勝れるは、言ふまでもなし。女の女らしからぬものに較ぶれば、女らしきものゝ優なること、また、勿論のことなり。然しながら、これたゞ、非議非難せらるべきものに比較して、僅に、優者たることを得るに止る。いやしくも、既に、人らしからむことを望む人にして、斯くの如きのみにて、満足せらるべきものならむや。

。らしといふ辭は、唯、形式の或物に似寄りたりといふほどの意義にして、決して精神に於いても或物と一致すといふには非るなり。然れば、逆賊足利尊氏の如き謀叛せざりし前に、相應に忠臣らしかりしなり。藤房卿正成公、必ずしも、亦、忠臣らしくのみもあらざりけむかし。最も適切なる例は、茶坊主に打擲せられて抵抗せざりし彼の最も怯者らしかりし木村重成が、よく、梟雄家康を屈せしめたる眞の勇者なりしにあらずや。らしきもの丶信ずべからざること斯の如し。

近時、女子教育に關する設備の、漸々完全に近くにも關らず、其の效果の見るべきもの尠き所以は、即ち、このらしくせよ說の、隱然跋扈を極むるありて、其の教育、専ら、形式にのみ流れて、精神の訓練に意を用ゐることの疎なるを以つての故にあらざるやの疑なき能はず。抑も、女子教育の目的は、女子を完全なる女子に成長せしむるにあり。彼の單に女子らしきもの丶如きは、疾く、世に其の形影を絶たむことを希圖するにあり。



論説

泰平の良婦（上）

三輪田眞佐子

神國及び、支那の烈女傳を見るに、多くは、非常の境遇に陷りて、或は義を正し、或は、操を守り、貧に堪へて、孝養を盡し例のみなり。西洋の名婦傳を讀めば、概ね、非凡の事業をなし、非類の勉學を爲し〻例のみあるが如し。故にこれら、東西の烈女名婦の傳を繙くものは、おのづから芳名を後世に遺し、雷名を内外に轟かさんとならば、苟も非常の境遇を待つか。將た、非凡非類の行動あらざれば能はざるべしと信ずるに至らずとせす。果して然らむ、世の烈女名婦たらんと志すものは、身の不幸來れよかしと祈るに等しき觀なきか。あな怪し。

固より、盤根錯節に合はざれば、以て利器を知るに由なきが如く、人は、患難に逢はざれむ、以て、人物の眞價を定むること能はざるべし。蓋し、患難は、不幸の一種なれば、わざと好みて求むべきにはあらざらんも、女德の有無を糺し、心力の强弱を試めさんとならむ、良人に先だ〻れし寡婦の行の操行を見よ。自力を恃みて、子孫を撫育する主婦の技量を見よ。或は、紅塵十丈の世路を渡りけるも、未だ、身に一點の汚垢を留めざる女子なるか否やと。そが過去の來歷をたどり考へよ。されば默して、その人物の如何を卜するに足らん。

まことや、高岳も、或は崩れ、或は海と爲る世の

中なれば、一門の榮華も、恒久のものとな思ひそ。さればにや、患難を恐れて、世を厭ふ例は、多く見るところなれども、おのれ思ふに、人のこの世に生るゝや、偶然にあらず、從ひて、責任あり義務あり。然るに、一朝來らんとする患難を恐れて、遁世する如きは、その責任と義務とを果さずして、跡を隱すものといふべし。誰か、他人より財を借りて、後ち、我は拂ふに由なしといひて走るものを美なりとせむ。わが國文には、佛教の厭世的分子を含むこと少からず。然るに、女子は、好みて國文を讀むも、惜しきかな、國家の本來など會得するもの少くして、稍もすれば、墨色の衣、艸の庵などのみを戀ふる傾向を生ず。これ國家の慶事にあらず。

但し、佛教の趣味は、文學として見れば、深遠幽妙の價あれども、まだき齡にたけずして、世に責任、及び、義務あるものをして、早く、世を厭はしむるごときは、日本國民の命運に關係すること大なり。そも〳〵佛とは、印度語の（ブダ）といふ音譯にて、その意味は覺者といふ義なり。故に煩惱を解脱して、眞理を悟るを以て、佛教の主眼とすべければ、若し、何人にても、眞にその教義を大悟徹底せんか。身は、民俗に伍せんも、涅槃の境を見ること難からじ。などか、深山の奥に行きて、柴の折戸を閉ぢ、讀經に餘念なきを以てのみ、始めて、佛道に入るとせんや。凡そ、宗教にまれ、學派にまれ、その開祖の意義を誤了するは、後世の常なれば、わが、國文を見て、取るべきところを取らず、獨り厭世の分子を半解して、日進月歩の今日に際し、國家の開明に戻るごときは、同胞の女子を毒するのみならず、恐らくは佛者の本意にもあらじ。

されば、良人の死を歎きて、自刃するごときは、寧ろ煩惱の甚しきものなりといふべし。故に良人に先だゝれし婦人は、孤兒を懷きて、世波に向ひ、斃れて後に止むべし。されど、良人も、艸葉の陰にありて、其の靈を安んずるに足らん。その他、貧苦も疾病も、人力を盡して止むなくば、笑ひて、天命につくべし。あはれ、今や、わが國の武士道すたれて、かゝる氣慨の女子なし。從ひて、良人に内顧の憂あらしむるは宜なり。

女子の祖父母に對する の道

岸田松一郎

家の祖父母は、即ち、我が愛敬する父母を、生育して、祖先より傳來せる家産を讓り與へたりし人なれば、家に對する功勞と、世故を閲歴せる經驗とに見るも、又、我が父母の至鴻なる恩人なれば、我、今日父母より享受する恩遇を思ふに就きても、是、皆、祖父母の賜なることを思ひて、敬愛の意を表し、之に事ふることは、敢て、我が父母に異なることなかるべし。

總べて、祖父母の、我に於けるや、專ら愛憐の至情を致して、我を遇するものにして、其の優渥なること、往々、其の子に逾ゆることあり。世の諺に、惡くき嫁の胎内より、最も愛らしき孫兒生ると。夫、祖父母は、實に、此の意を以て、我を遇するものなれば、其の恩愛周到にして、其の濃厚圓滿の情は、却て、父母に優るものあり。されば、己の齡、既に傾きて、四肢身體意の如くならざるに至るも、猶、且、我を愛護して、片時も怠らざるものなれば、假令祖父母の既に衰耗に赴き、其

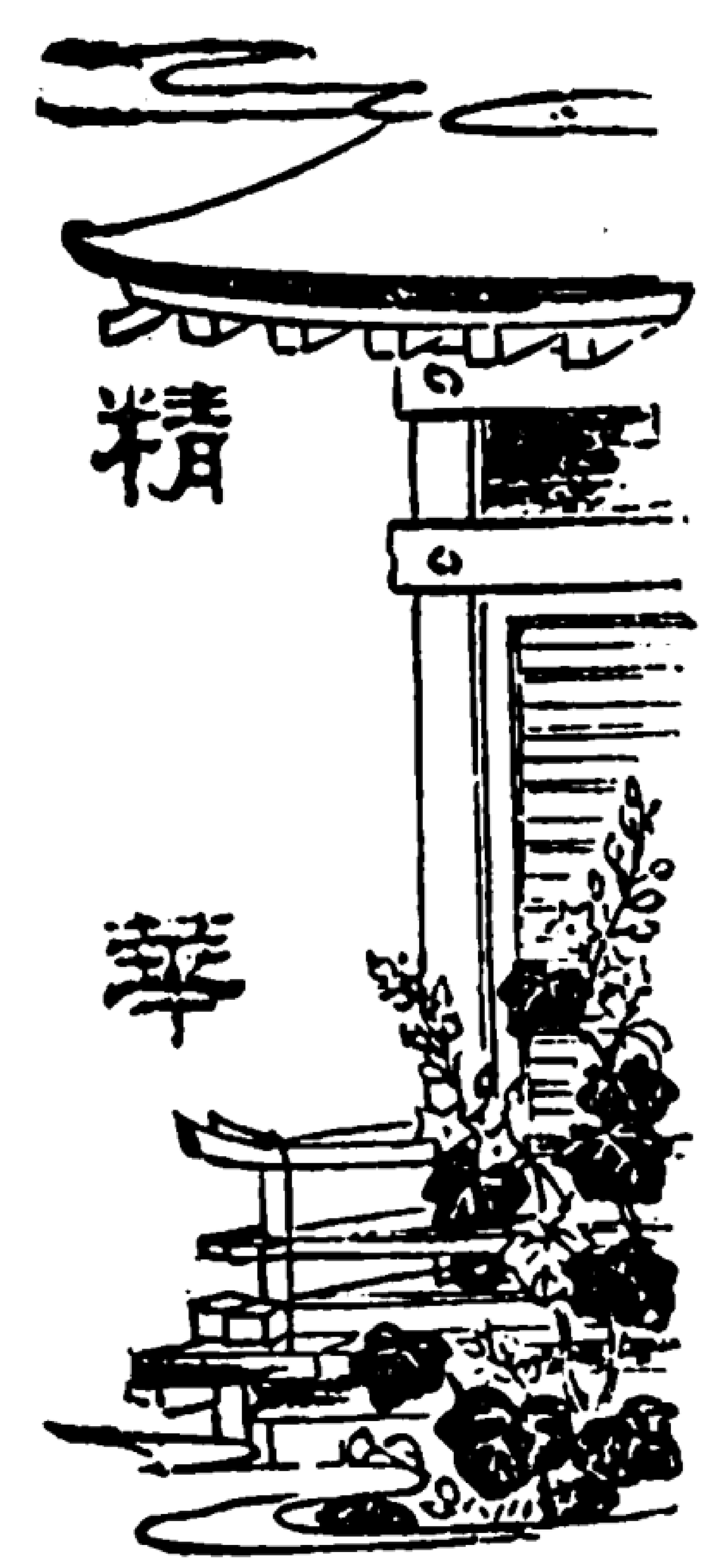
の言行往々常度を脱することありとも、益之を敬し、之を愛すべし。決して、侮慢虚欺の言行あるべからず。

前上既に述ぶるが如く、祖父母は、即ち、我が父母の前代に生活して、其の世故を經しこと多く、隨て、萬般の經驗に富めり。されども、身體、既に疲れ、神氣も、亦、既に衰ふるを以て、其の見聞す事毎に、心を勞すること敏なれども、其の割合に、身心を自由に用ゐること能はざれば、事大小となく、注意の仔細に亘るに過ぎ、却て、壯者に厭はるゝことあり。又、感動の過敏なるものなれば、其の出遇ふ事毎に、涙を揮ふことあるは、是、老人の常態なりとす。されば、老人の注意を以て、無用の事となし、或は杞憂に屬すとして、冷眼之を迎ふる如きは、大なる誤りと謂はざるべからず。老人は、只何事も、己の經驗に徴して、利害を考ふるより、投棄し能はずとして、注意を與ふるなり。焉ぞ、無用と知りて、之をなさんや。只其の事の次第により、時代の異なる所より、其の意見の取るべからざるものもあるべしといへども、老人の意見は、徹頭徹尾陳腐にして、取るに足らずとするは、最も、不可なり。宜しく、其の意見を敬承して、其の當否を考ふべし。若し、夫の意見の取るべからざるものならば、冷然、之を抛棄し去らずして、只、之を胸中に藏め、他山の石として、後日の參考に供へなば、徒に老人の感情を害はずして、又幾分の利益となるべきは、蓋、疑あるべからず。

凡そ、老人は、其の身體、既に衰耗し、其の神氣も、亦、衰へたるを以て、何事も、其の爲すべきを知りつゝ、總べて懶きを厭ひて、偏に、其の心を勞するを以て、之が孫兒たるもの、能く、其の

意を體して、己の心身の許す限りは、務めて、其の勞に代りて働らき、假令其の命ずることなくとも、能く、其の意を迎へて、之を爲し、何事も、氣輕に、之を營みて、聊かも、煩勞を厭ふの振舞あるべからず。女子は、男子に比すれば、温順縝密にして、殊に家内の細事に當るに適するが故に、常に、翼々として、注意を怠ることなくんば、最も能く、老人を慰むるに適するを以て、老人たるもの、爭でか、之を怡ばざらんや。且、又、老人が、健康の時にありといへども、衣衾洒箒の務に服し、閑暇ある時に在りては、肩を摩り、腹を按し、務めて、其の體を慰安すべし。猶又、世間の珍談奇説にして、其の心を慰むるに足るものあらば、之を説話し、或は、朋友知人の來ることあらば、常に、怡々として、其の傍に侍し、孜々として、周旋すべし。大凡、斯の類の事は、短慮、粗宕なる男性の能くなすべき所にあらずして、柔順緻密なる女性の能く適する所なれば、聊かも、之を厭ふの狀あるべからず。假令、婢僕を使ふ身にありとも、此等の事を躬らするを厭ひて、皆、婢僕に命ずるが如きは、甚だ不可なり。總て、老人の心には、最も濃厚なる愛情を致して、其の兒孫を待するものなれば、婢僕に打任せて、之をなさしむるときは、爭でか、老人の歡を盡さしむることを得んや。是を以て、柔順なる心思と慇懃なる振舞とは、千金の慈味を求めて、食膳に供するに優ること萬々なりとす。





勅語要義 第三

東久世 通禧謹述

爾臣民父母に孝に、兄弟に友に、夫婦相和し、朋友相信じ、恭儉己を持し、博愛衆に及ぼし、學を修め、業を習ひ以て智能を啓發し、德器を成就し、

〔孝于父母友于兄弟〕謹みて、案ずるに、父子の道は、天性なり。父子、相親愛する情は、自然に出づ。皇祖以來君臣共に、子々、孫々一氣流通して、萬世、祖先の子孫を見るも、子孫の、祖先を念ふも、父の子を思ひ、子の父を慕ふと、曾て、異るなし。さて、祖先は、父母の始なり。父母は、子孫の始なり。これを、樹木にたとふれば、兄弟は、恰も、枝葉の如し。其の形體分離別立すと雖、其の根幹たる父祖の血胤を受け、同氣相貫きたれば、榮枯盛衰相伴ひ、痛苦歡樂之を同じくして、同心一體相扶け、相倚り以て、其の祖先に事ふるは、我が國、自然の道なり。

〔夫婦相和朋友相信〕夫唱へて、婦和し、婦は夫に先たず、夫を天とし、上とし、婦を地とし下とし、陰陽剛柔相合して、一家を整ふべきは我が國の道なり、朋友の交は、信を主とす、相信じ、相倚り、相謀り、同心一體以て、臣子の本分を全くせんは、一に、信に基せり。我が祖先信義協心、ひとしく、皇室に仕へ奉れる明鑑は、歷史に、昭々として、範を、後昆に垂れたり。

〔恭儉持己博愛及衆〕父子の親、兄弟の友、夫婦の和、朋友の信、これ等、諸德の實踐は、恭儉の二者を以て全うすべし。謙にして、人を敬ふにあらずば、以て、慈惠の道を全うすべからず。恭敬は、實に、品行の本なり。親を敬する者は、敢て、人を惡まず、親を敬する者は、敢て、人を慢らず、父子、相愛し、兄弟、相親む情を以て、親族朋友より、之を他人に及ぼし、廣く、一國天上に及ぼす。之を博愛といふ。故に、博愛の本旨は、親より、疎に及ぼし、近きより、遠きに及ぼすに在り。疎を先として、親を後とし、名に走りて、心に本づかざらんは、博愛の義を距ること、最遠きなり。

〔成就德器〕學に藝術百科の學あり。各養ふ所、一ならずと雖、學ぶ所は、必、純正至良の德性によりて、始めて、用を全うするを得べし。

人、幾多の才能技藝ありと雖、苟、この德を離れんには、その技能は、偶以て、世を紊り、人を害せん。之を、眞の才藝とは云ふべからず。人、或は、智と德とは、二なりと思へるは、大なる僻事なり。是、もと、一物にして、人性に、兩面あるにあらず、德を離れては、智なく、智を離れては、德なし。苟德を離れんには、是邪智なり。之を眞の智とはいふべからず。又、智明ならざれば、德を全うすること能はず。是明德にはあらざるなり。故に、德とは、萬善を包有せる名にして、德外、又、智の區域あるべからず。德中、常に智あり。眞智は、常に、德中に包括せずといふことなし。愼み思ひて、智德一體の本義を誤るべからず。

嚴島小浦のじよろ女

田山とり子

山水の秀美なるところには、俊れたる人物生るゝとか聞きわたりしが、實に、然る理由もありけむかし。陸奥の松島と、與謝の海なる天橋立と相ならびて、日本の三景と稱へらるゝ嚴島の島中より、更に、また、うるはしき三人の孝女を出し、相尋いで、官より褒賞せられし事實は、三景に數まへらるゝ名にも勝りて、猶、いとゆかしきことならずや。孝女、一人は、やまといひて、明和七年十二月に、一人は、助六といふものゝ妻、これは、天明三年九月に、共に、よく老いたる父母に仕ふるを以て、褒賞せられき。

他の一人は、即ち、じよろ女といふ。小浦の船人善三郞が女なり。善三郞、年三十ばかりの時、怪我より、骨節いたむ病になりて、起臥さへも、われ一人にて、心に任せぬ身となりぬ。家もとより貧しかりしに、斯の災難にかゝりしことなれど、妻は、其の時、五歲なりけるじよろ女を、夫の側につけおきて、終日、漁る業をつとめ勵み、辛うじて、一家の煙を絕たざりき。じよろ女は、その頃より、はや、素直にて、大人なしく、母の歸るまでは、少しも父の側をはなれず、何くれと用を辨じ、歸へれば、直に近きわたりの野山に分け入り、落葉をかきあつめては、薪のもとめをたすけけり。斯くすること五年あまり、十歲といふ歲に、母に向ひて、妾も最早十歲にもなりつれば、心だに盡さむ、一家の糊口をさゝふるばかりの仕事もなりぬべし。今よりは、内におはして、父上のおぼすまゝに介抱せられよと、しひて請ひて許を得、これより、日々、貝ほる業に従ひぬ。曉

方に潮の干く頃には、深更に起きいで、先づ、茶を煮て、父母にすゝめ、さて、後、業にいで、貝をほり得れば、一度は、家に歸りて安否をうかゞひ、また、賣にと町に出でぬ。聊も暇あれば、落葉薪を拾ひ、或は、住居の掃除、水くむこと、總べて、母の勞を少うせむことをのみつとめけり。

年を加ふるごとに、父の痛所は、わろうのみなりまされり。じよろ女は、種々、手をつくして藥をもとめ、進むれども、一向、驗見えざりければ嗚呼、御身の痛をゆるむる術もがな。たとへ何十年うち臥し居らるゝとも、如何にもして養ひまゐらすることは難からねどもと、さめ〴〵と打泣きては獨言つを、聞けるもの、父母は更なり。知らぬ他人も、たゞ傳へ聞きたるさへ、感嘆がらぬはなかりきとぞ。然れば、人々、みな、じよろ女を待ちつけて、其の磯物をのみ買ひ求むる樣になり、母の業に出づる頃よりは、はるかに利潤おほくなりて、大に病める人の心をも安からしむるに至れり。

父は、七十二歳にて長命して死去りぬ。醫師への禮、葬式、後世の營、總べて、分に應じて懇につとめ、恥かましきことは、勿論なく、他人に助力を求むるやうのことも爲ざりき。是は、かねてより、毎日おのが得たる錢のうちを聊づゝを貯へおきて、この時の用とは爲けるなり。斯ること皆いつしか、國中に聞えわたりければ、寛政三年六月に、官より、銀二百目を賜はり、厚く、其の行を賞せられきといふ。

家政

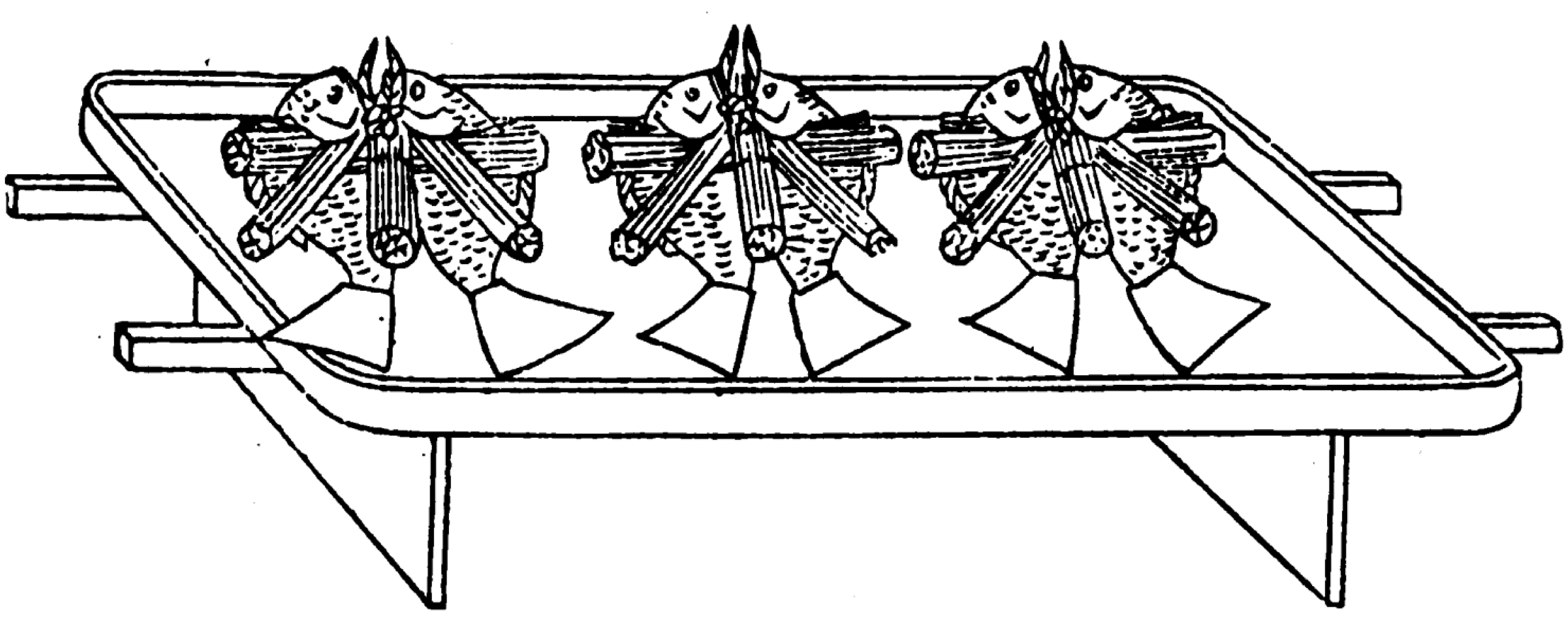


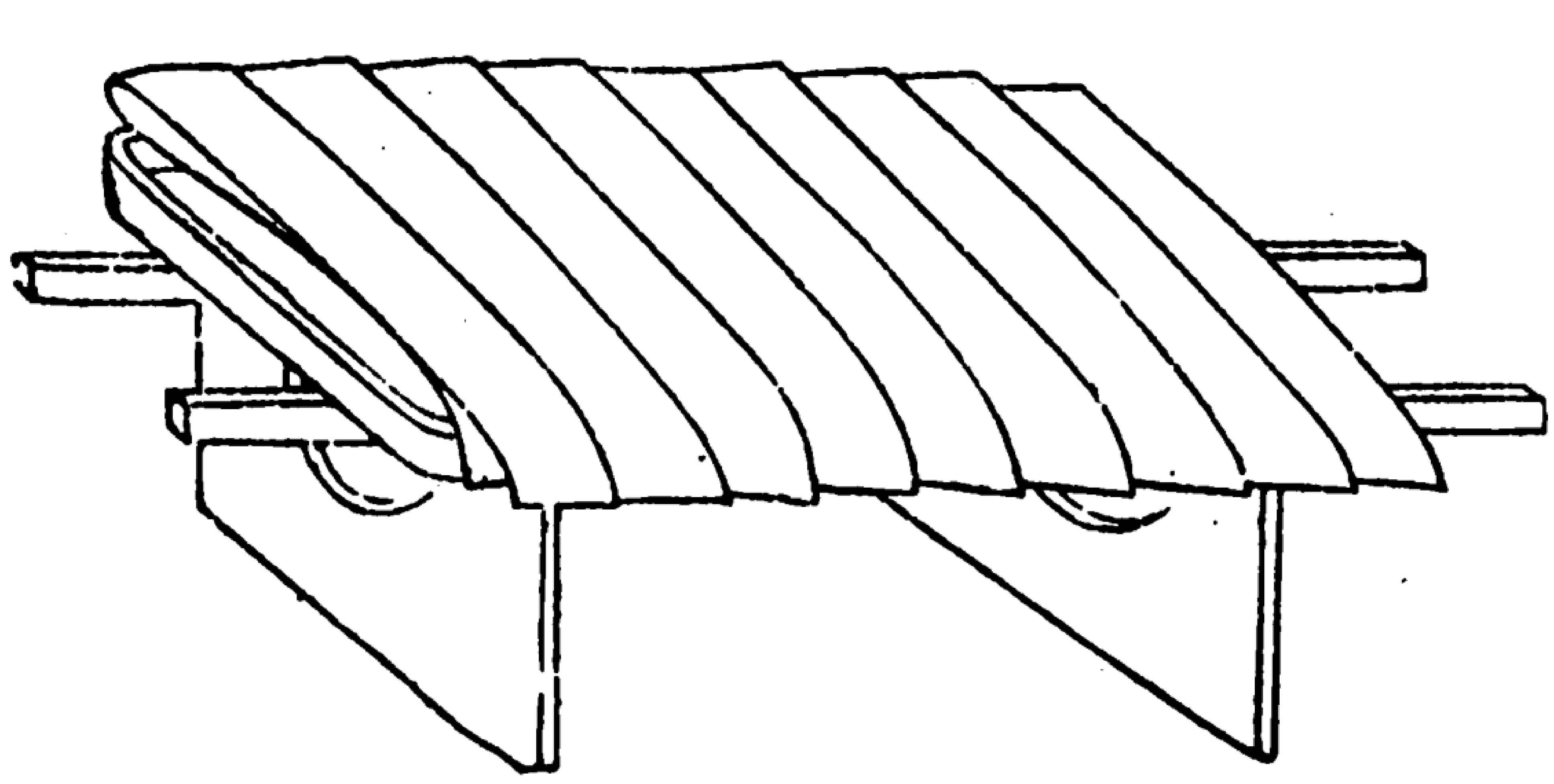
女禮

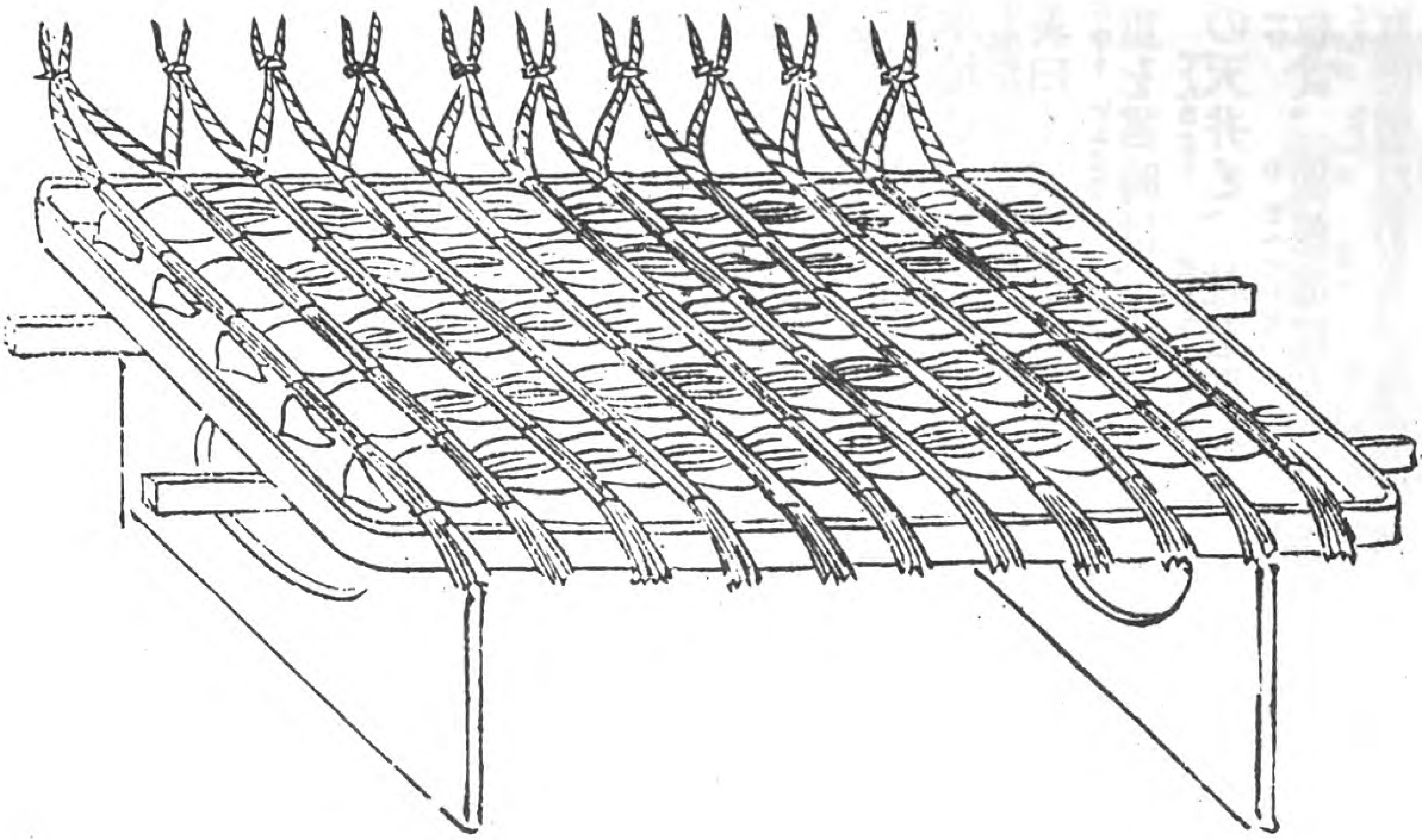
婚禮式（承前）

有住つね子

品物のつみ樣







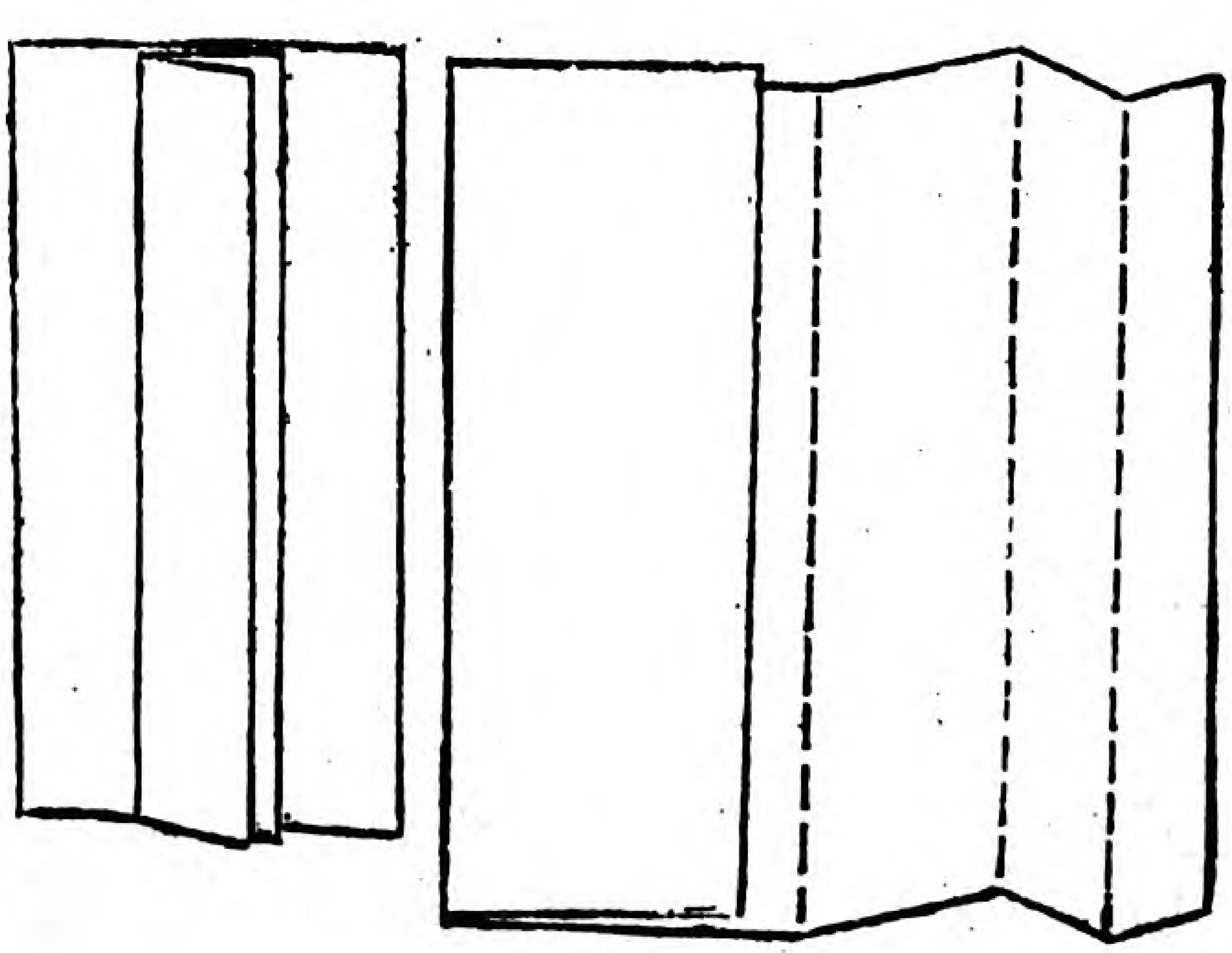
折方

萬用包

有住　くわう子

是は、祝事、又は、平日何品にても、包みてよろし。例により、水引をかくること。

折上



茶の湯

茶禮初學（承前）

孤峰庵祿仙齋不美
關 葦 雄

長板は二種あり。

一種は、黒眞塗、木地は、檜の木、端ばみ入、

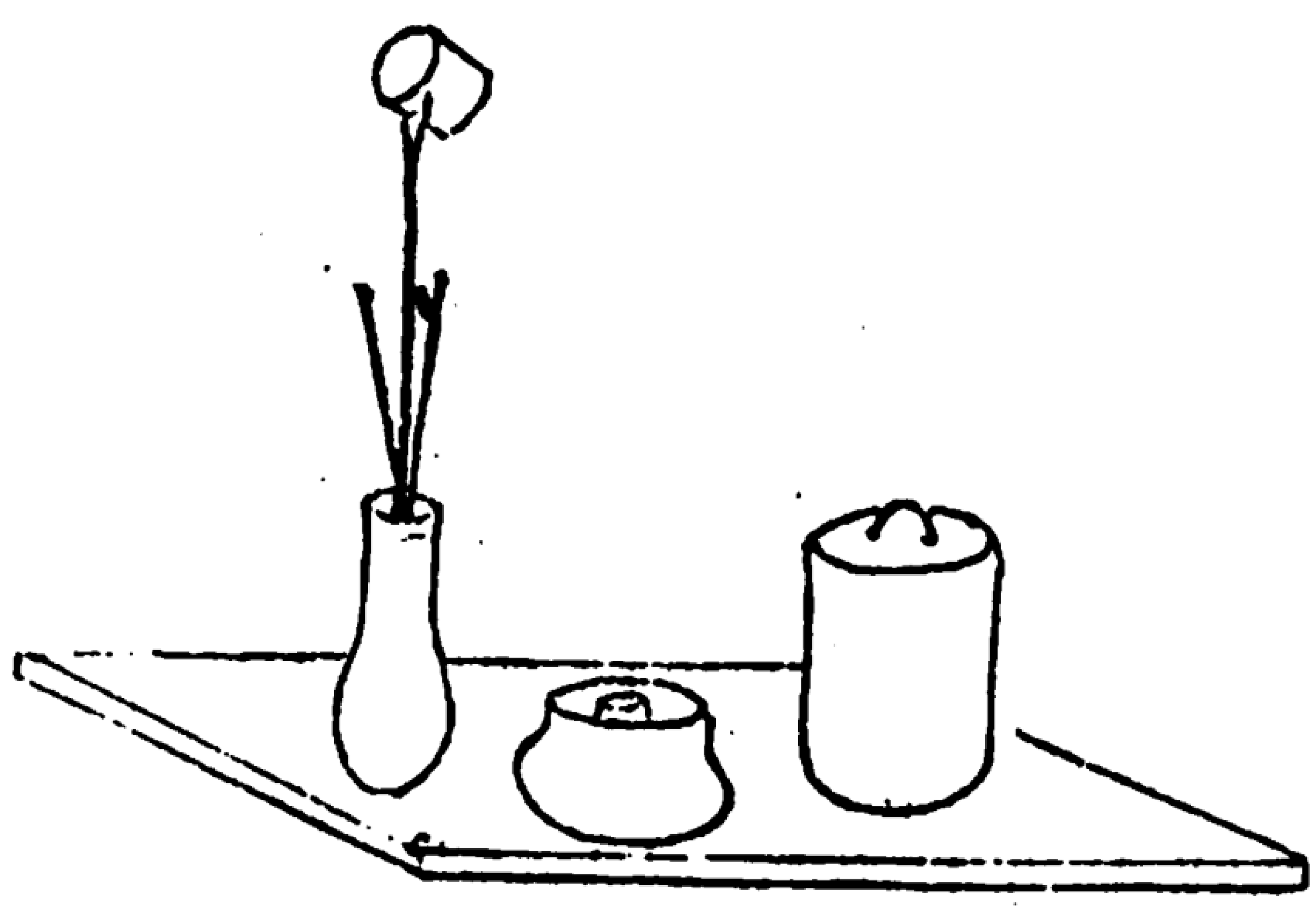
一種は、黒掻合塗、四方の面眞塗、木地は、しよち、炉の方は小、風炉の方は大、

桐の木地は、仙叟の好みなり。

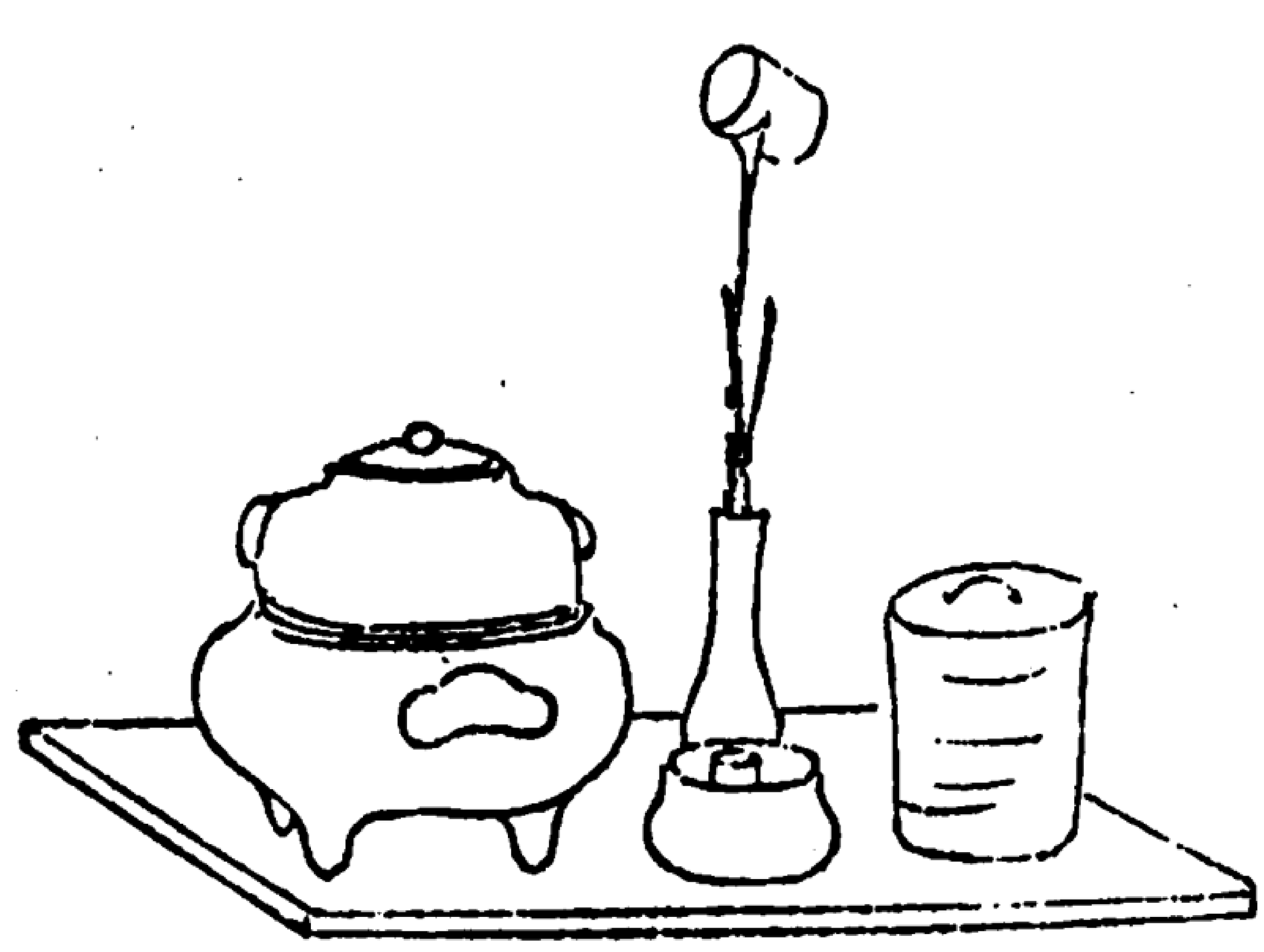
不美曰く、長板の類は、如レ斯三種類あれども、輕重を言時は、中々に重きものなり。眞の臺子の天井と、柱を取拔き、則、地板なり。爐長板は、居前竈目なり。點前の時、火筯を拔き取に習ひあり。爐風爐共に、先右手を出し、火筯の頭の、直下を持、拔出し、火箸の先、柄杓立の口を離れたらば、下にさげ、飜、或は、蓋置の脇を通り、膝頭に持來りたれど、前の方へ倒し、左手にて、最初持たる直向の方を、親指を上にして持、右手を直に、其の先の方を持、左手は火箸の頭の所を持、右手を放して、長板の左の方木口へ附て、頭を一寸出して、左手にて置べし。爐風爐共に仝じ、炭手前にては、爐の時は、羽箒を卸して、後膝をくり、板に向ひ、右手にて、火箸を拔取、左手に持ち、膝の上に控へて、又、膝を繰、元の坐に戻り、右手にて、例の所へ置合すべし。又、炭手前濟たらば、釜の蓋を掃き、火箸の先を三つ羽にて掃淨め、左手に持て、又膝を繰板に向ひ、右手にて、頭の際を持、柄杓建に戻すべし。次に、膝を繰り、爐に向ひ、釜

の蓋を切掛べし。濃茶の時は、修覆は勝手の
の方、板の上に假置すべし。

爐の時長板飾
總飾と云時は水指
柄杓建(柄杓火箸)
建水中に蓋置建水
飾らざる時は建水
の席に蓋留有べし
下圖の如し



風爐長板飾
初め飾如斯
風爐も建水がなけ
れば爰に蓋置を飾
るのである長板は
蓋置は穂屋一閑人
等尤よし點前は爐
風爐共に火筋を抜
きて長板の左の方
板の小口へ押付て
置頭の方一寸程出
し置



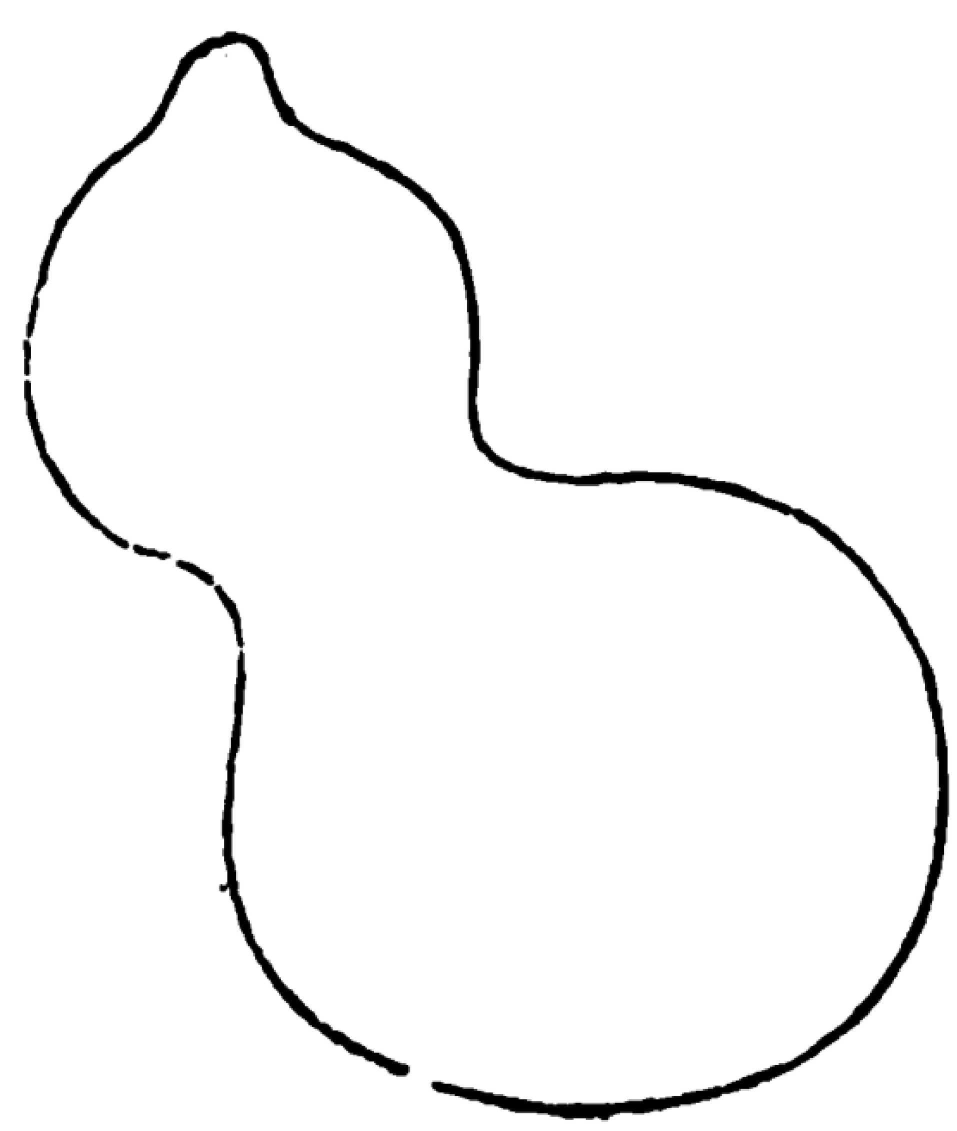


宗政

たちぬひ

匂ひ袋

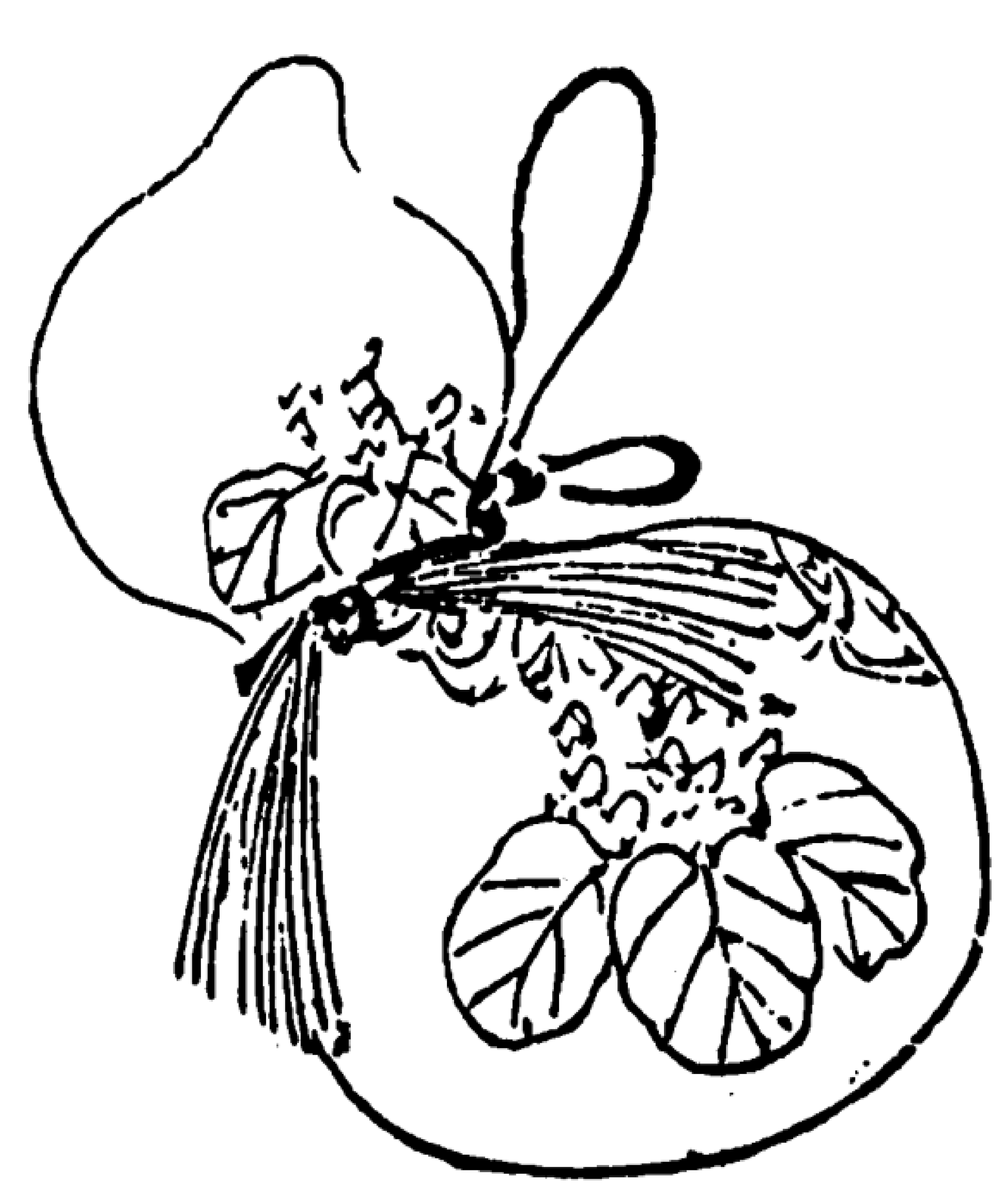
西山たい子



へうたんのかたち

まづ、右の如き形に厚紙をきり、裏をも同じ形にて、少し小さめにきりおき、例の匂ひ綿を入れ切をきせ、うらにも綿を入れ、切をきせ、紐をはさみおき、裏と表とを合せ、表に、ぼかし、また花等を繍き、眞中のくゝりめにさげ緒を結びつくべし。

その圖



だいどころ

薩摩揚

魚類の頭骨、又た、皮を去り、出刄庖丁の、脊にて、能くたゝき、摺鉢にいれ、食鹽を加へ、能くすりたる中へ、味淋の煮切、(又は、砂糖にても、よろし)を少しと、鷄卵を加へ、摺り交せ鹽梅し、厚さ、二三分位、小判形になし、牛脂肪、又は、胡麻油の鍋を火にかけ、あまり、烟の出ぬ内に、前の摺肉をいれ、兩側共、狐色になれる時、引あげ、紙にて、油氣を、能くふきとり、膳に供すべし。

松茸寶錄焼

はうろく焼は、先づはうろくの中に、鹽をふり、其の中に、松茸海老(程よくさきて)栗(皮をむき、澁を、能くとりて)鯛の切身、おの〳〵、はうろくにならべ、其の上に鹽をふり、松の葉を、少しのせ、同じはうろくをかぶせ、針金にて、四つにしばり、へつつひに、薪をもやし、火の出來たるとき、中にいれ、上よりも、能く火をかぶせ、焼たる時をはかり、とり出し、針金をとき、其の儘臺にのせ、客の前に出し、ふたをとり、各とり交せ、皿に盛りて、出すべし。ストーブへいれ、蒸焼にすれば、極々宜し。

鰯の糠漬

鮮らしき鰯の頭と、腸を去り、鹽をふり、二三時間程おきて、糠三升に、鹽二升の、割合にて、よく揉みませ、米水にてねり、糠味噌の如く、鰯を能程の桶につけこみ、壓をして、二日程置き、浮みたる汁を捨て、食する時は、糠を洗ひ、四五分位つゝに切りて、酢につけて、食するもよ

し。又、炙りて、食するも、野菜と交せ煮にして、食するも、佳なるものなり。

割烹と禮節（承前）

第二編割烹教授

（第一節近來の教師と教授法續）

家永榮子女史

女史は、華族女學校教員として、又、割烹を講ず。其の所説は載せて、大日本女學會の女學講義にあり。以て其の所論たる割烹總論を讀み來れば、其の講述平易にして盡さるゝが如し。其の總論にいはく、

○調理法總論

食物調理の忽せに爲べからざる事は、今更に言を俟たず。然れども、世の開明に趣くに從ひ、事物の頻繁になりもて行くまゝに、人の精神を勞する事益々はげしく、之に次て増加するは胃病なりかし。故に食物を撰ぶには、成べく滋養分多くして、消化し易き物を以てすべし。然れども、食物は、其の質の滋養に富むと消化し易きとを撰ぶ事必要なるのみならず、これを烹炙調理する事の巧拙によりて、人身營養の爲に、能くも惡くもなるものなりと云ふ事を能々理解して、主婦たらん人は、宜しく勉めて、この業に注意習熟すべきなり。

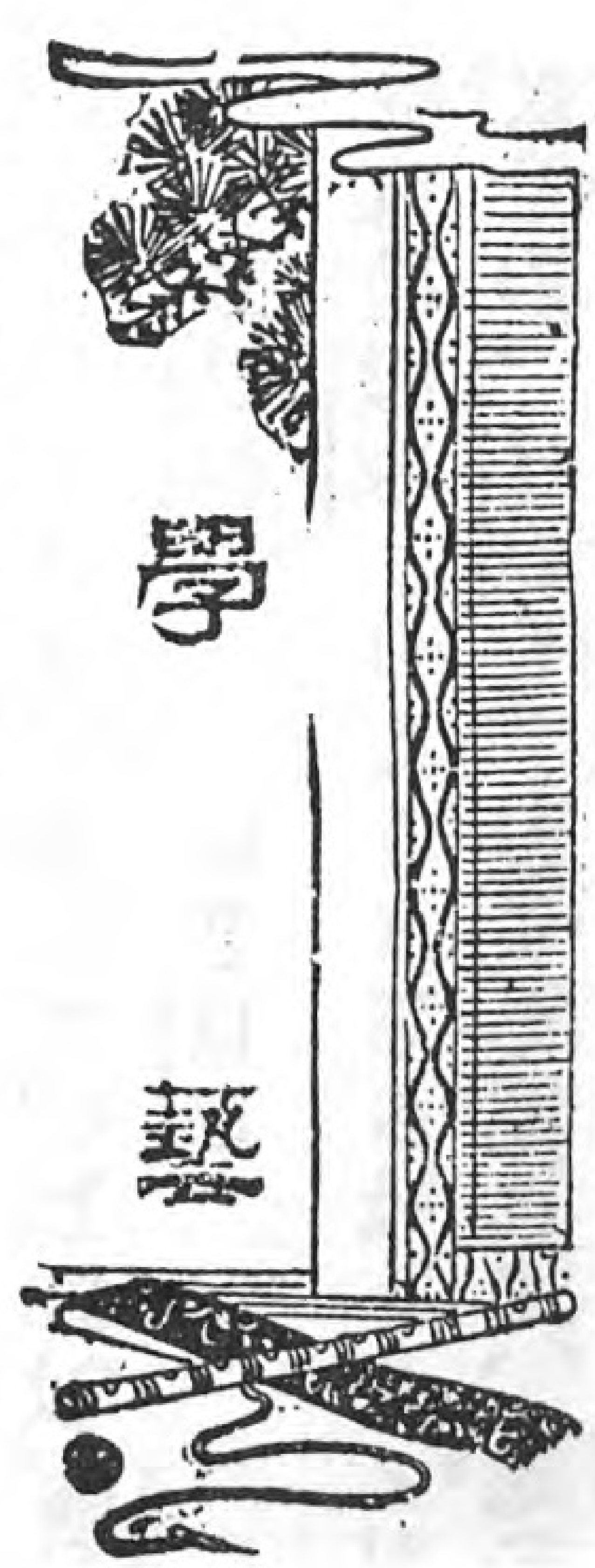
抑吾國の料理法は、短からざる歴史をもつて、變遷進化して來りしものなるが、近來に到り、吾が國固有のものに西洋料理の方法を交へて、大に衞生に裨益する事とはなれりき。されば一家をなす者は、普通の日本厨房に於ても、爲し得らるべき西洋風の料理法の極めて、其のたやすきものを取り以て、是を覺え置く事も、亦必要なりと信ず云々

（料理の獻立に付きて）

料理の献立は、如何に富貴の家の主婦なりとも、盛宴を張り、賓客を請ずるが如き場合にありては、必先自らすべき事なり。何となれば、献立の適否によりて、大に來賓の感情を左右する事あり。而して、賓客が嗜好を知らんとするには、先其の生活の度職業年齢を察して、扨其の氣候をも斟酌すべし。云々

其の献立料理の方法撰定宜しきが爲に、食ふ者をして、甘美なりとも、珍奇なりとも、感ぜしむるこそ、上手の仕方とはいふなりけれ。

献立の取合せは、其の種類の色々にして異なるを良しとす。例へば、汁の物にしるの物、炙物にやき物、甘きとあまき、鹽辛きとしは辛きなどの重ならぬ様にし、色も形も、亦之に次て同じ様にならぬ事を注意すべし。云々



國文學講義

紫式部日記講義（一）

井上頼文

秋のけはひのたつまゝに、土御門殿のありさま、いはんかたなくをかし。

池のわたりのこずゑども、やり水のほとりの草むら、おのがじゝ、いろづきわたりつゝ、おほかたの空も、えんなるに、もてはやされて、ふだんの御どきやうの聲々、あはれまさりけり。

やう〳〵、すゞしき風のけしきにも、れいのたえせぬ水のおとなひよもすがら、きゝまがはさる。

釋義

この段は、この日記の發端にて、まづ、土御門殿の光景を評し、さて、つぎ〳〵に、種々の事實を書き出すべき、いはゆる、總序なり。すべて、何種の文によらず、冒頭の文は、きはめて、書きにくきものなるに、わきて、國文の起首は、たやすく、筆をくだし難し。されば、かゝる文例を玩味して、その着筆の結構をさとるべし。

さて、この起首の文は、たゞ、ふと、讀みくだしたる時は、さのみ趣味もなきやうなれど、僅に「秋のけはひの云々、いはんかたなくをかし」の一句を以て、まづ、その大綱をあげ、それより、「池のわたりの云々」など、順次次第をおひて、細目をときいだしたる所、上手の筆ならでは、かくたやすくは、うつし難きわざなり。

よく、心を注ぎて見るべし。

さて、こは、一條天皇の中宮、彰子陛下が、後一條天皇を、はらませ給ひて、御父、道長公の、土御門の第に、退出せさせたまひし程のことにて、式部も、その御供して、すなはち、此の第に奉仕せるなり。

○秋のけはひ　こゝに、秋といへるは、一條天皇の、寛弘五年、七月の上旬のことなり。そは、後一條天皇の御誕生のことを、日本紀略、榮花物語、百錬抄などに、寛弘五年の九月、左大臣道長公の、土御門の第にて、生れたまひし由、見えたるにてあきらけし。

けはひの、けは、氣にて、はひは、

くさはひ　にぎはひ

なりはひ

などの、はひと、おなじ意にて、氣の立つ光

景を、いひあらはすことばなり。

○土御門殿　中宮の御父、道長公の御家なり。土御門の南、烏丸の西にありきとぞ。日本紀略、百錬抄などには、上東門の第ともかきたり。

拾芥抄に（原本漢文なるを、よみやすからんため、かきくだし文にあらたむ）京極殿とある條に、土御門の南、京極の西にあり、南北二町、其の南一町、之を入らる。道長公の家といひ、或は、大入道殿の家ともいふ。上東門院是なり。後一條、後朱雀、後冷泉、三代の帝、此の所に於て誕生あらせらる。大江匡衡が宅なり。皇后四人も、此の所に於て誕生あらせらる。此の家は、紀伊島、賀茂明神の通路云々、後一條、後冷泉南一町を加へらる、と見ゆ。

○をかし　をかしといふことは、笑ふ時にも稱むる時にもいふことなるが、こゝは稱めていへるなり。

さて、をかしの假字につきては、諸家の說もおほかれど、たしかに、一定せざるがごとし。

本居宣長翁の、玉勝間（おかしと、をかしと、二つある事とある條）に、田中道麻呂が考へけるは、物をほめていふ、おかしは、おむかしのつゞまりたるにて、おの假字なり。又笑ふべき事をいふをかしは、をこといふ言のはたらきたるにて、をの假字なり。されば、こは、本より二つにて、異言なるを、假字づかひみだれて、一つに書くから、同言のごと心得たるは誤なりといへる。まことに、さることにて、いと、よきかむがへなり。はむる

と、わらふとは、其の意大かた、うらうへなるを、いかでか、同じ言を通はし用ふることのあらむ。おむかしは。古へ言にて、書紀に、徳の字、また、欣、感などを、おむかしみす、とよみ、續紀の宣命には、うむかし、とも見え、萬葉の歌には、おを、はぶきて、むかしともよめり(下略)とて、贊成せられたれど、この言は、稱美ると、可笑と、ふたつにわたりて、假字は、いづれも、をかしなりと、藤井高尙ぬしの、いはれたるが、やゝ、おだやかなる說なるべきか。

なほ、石原正明氏は、蜻蛉日記なる「いかに、つゝじの、をかしからまし」といふ歌につきて、稱美のかたも、をの假字なり、と辨じ、森嘉基氏は、曾丹集なる「にほはねど、ほゝゑむ梅の、花をこそ、われもをかしと、をりてながむれ」といふをひきて、ほむると笑らと、ふたかたにわたる例證ぞといはれき。

○やり水　掛樋にて、池などに、水をよび入るゝをいへど、こゝは、庭内を流るゝ溝水なるべし。そは、下文に、やり水、はらはせたまふとある、前後の文にて心得べし。

○おのがじゝ　玉の小櫛に、めん〳〵、それ〴〵に、といふ意なり、とありて、他をかへり見ず、自分〳〵、勝手〳〵にすることをいふ。

○空もえんなるに　えんは、艶の字音にて、空の景色の、すゞしく、何となく、優美なるさまをいふ。

○もてはやされて　もては、もてかくすなどの、もてにて、添へたる言はやされては、賞美せられての意なり。

○ふだんの御どきやう　ふだんは、不斷にて、たえずの意、中宮の御姙身のほどなれば、御安產を祈らんため、斷えず經文をよましめ給へるなり。

○やう〳〵　やゝの音便に、うのそはりたるなり。

○おとなひ　音なひは、音なすといふにおなじく、水の流れて、音のする狀を、いひあらはす言なり。

さて、このなひを、類從本、扶桑拾葉本、古巖本、一本等に、なんに作れるは誤なり。水の音なん、と、かゝりては、まがはさるゝ、と、受けざれば、とゝのひがたし。榮花物語、初花の卷に、おとなどに作れるも、また非なり。

今、釋本、芳園本、蘆廼屋本、一本等によりて改む。さて、この水音は、上のやり水の音なり。

○よもすがら、きゝまがはさる　よもすがらは、夜も盡の意にて、暮より、朝まで、ヨヂウ、と、いふにおなじ。

さて、きゝまがはさる、の上に、御安產を祈る、讀經の聲に」との意を含めたるは、これ、文法に、いはゆる、省筆法なり。

譯　解

寛弘五年、七月のはじめ、秋の景色の立つまゝに、中宮の、御父ぎみ、左大臣、道長公の、土御門の、御やしきのありさまは、言葉にかけて、いはんかたなくおもしろし。

さぬだに、秋のけしは、あはれなるに、庭前を見わたせば、泉水のあたりなる、木々の梢なども、遣水のあたりなる、草村なども、おのがまゝに、

濃くも薄くも色づきわたりつゝ、うつくしきを、

まして、一面の空の景色も、優美なるに、一段と、ひきたてられて、あはれさ、いはんかたなし。

かやうに、秋の景色のまさるにつけても、中宮の御安産を祈らんとて、御持僧等が誦みあぐる、御經の聲々が、キッウ、身にしみて、あはれさ、ひときは勝りけり。

次第〳〵に、涼しき秋風のたつにつけても、すべての人々は、ひたすら、御安産をのみ祈りて、夜もやすくは寝られねば、例のきゝなれたる、やり水の流るゝ音も、ひとしは、耳だちて、終夜、かの讀經の聲かと、聞きまがはさる。





漫録

女訓綾廼雛形（巻の壹承前）

楫取素彦

婦徳婦言婦容婦功の教あり。婦徳に入るべき便は、さきに、その一二を示せり。爰には、言容功の一端を示すべし。凡そ、人の言葉は、最も大事のものにして、一言のうへにても、家國を起しもし、亦敗りもしつべし。故に君子は輙く言を出さず、一言にても過ちあるべきや否やを、よく分別して、のちものいふべし。一度口より出で、反へらぬものは言葉なり。そのよろしきは、身の譽となり、宜しからざるは、こよなき恥をうくるぞかし。白

圭といふ寶の玉も、玷たらば、なほ磨きて補理すべし。この言の玷たるは、いかにともすべなしといふ意の詩句を、みたびまでうち誦せしは、南宮敬叔と云人なりき。宣聖もかゝる用意をいと賴母しと思ぼしめして、姪なる方を妻せ給ひしとぞ。聖人の言を重んじ賜ひし芳蹤、すでにかくの如し。婦人に於て、殊更に愼むべきは、詩の瞻仰の三章に其のいましめあり。婦人のさし出て口かしこく物言ふを長舌といふ。長舌の婦、國家の禍をもひき出すべきはし立ぞと、ふかくいましめおかれしなり。次にものゝいひさま詞のしなをたしなむべし。假めの一ことにも、其人からの見ゆるものなれば、ことにこれを愼むべし。先その一つをあげて言んに、國處の方言なまりは、是非もなし。よく、自他の差別を辨へて言ふべし。我が父母伯叔父姑兄姉の類を人に對ひて、某々サンと言ふものあり。

此の邊りの女子は、しかいふもの殊に多し。如何にも、聞にくゝ、傍へ聞するも、氣の毒に思はる。それにもまして聞ぐるしきは、唐さへづりとりまぜたる書生言葉なり。彼の冠者の君の入學にめしつどへられし博士達の物言振舞、異樣なるを、式部の御許が、筆尖に弄せし有さまも、かくやとばかり思はるゝに、いとらうたく、あてなる櫻桃の唇もて、キミよボクよと言ひ出たらん。さながら牝鷄の晨つくりし樣の似つかはしからぬばかりかは。頓でよからぬ祥ともなりもやせんと、ゆゝしくも、また心元なくも思はるゝになんありける。都べて女は、姿詞とも、優にやさしく、ひたすら女めきしぞ目やすき。ものによそへて言はゞ、つくし箏に雲井の調の柱たてゝ、今樣めいたる唱歌を、聲はのかにあはせたらん、俗びていやしくも聞えず、また神さび古めかしくもあらぬ程にこそ

あらまほしけれ。

一髪梳粧し、容するは、身ひとつの風流物數奇にあらず、父母舅姑に事へ、夫へ對する禮儀にして、家の吉祥を祝ひ、かつ心のうち清く正しきを表する意なり。凡そ清きを愛で汚穢を忌みきらふは、なべての人情にして、幽冥鬼神と申せども、これに異なる事は無るべし。女はもとより、人に從て、身を立つるものなれば、人の忌みきらふ事は愼みて避くべき事ぞかし。醜き人も、身を清くせば、天神をも祀るべく、西施ともいはるゝほどの者も、汚きもの被らば、鼻うち掩ひて、人やすぎなん。假令、おのれは、事そぎ心易きを好む性質なりとも、又は賤が手業のいとまなみ櫛笥の小ぐし取あへぬ身なりとも、そのほど〳〵につけて心ばかりの身たしなみはあれかし。すぐれたる容貌も、寐くたれ髪の素面は、氣うとく冷じう見ゆるものなるを。さりとて、合鏡眉はきを左右にとりて、巳の時過るまで、鏡臺にむかひ、目を驚かすまでにつくりなさんは、人の數にも數まへらるまじき、遊君妓女等が所業にこそあれ。つや〳〵よき人のすべきわざにはあらじかし。治容誨淫といふ誡もあるものを。たゞ化粧するは、日毎の禮儀なり、祝ひなり、心のうちの清きを表はすためぞと心得て、おこたりもせず、過しもせぬほどにこそ。ます鏡手にとるたびにうつしみよ心の塵はありやなしやと衣のきなし、姿かたちつくろはん樣は氣さやかに、花やぎたらんより、露おもげなる秋萩の、ほのかに咲出たらん、匂ひ深くいうに艶しきこそなづかしけれ。

一裁縫あらひすゝぎを始め紡績糸とり、機織蠶かひし、庖厨の事賄ふは、女の本分なるをや。唐土周の世には、后妃の位にとそなはるべき姫御前

の葛かつらを晒して布を織り、洗ひすゝぎの業までも、親せられし勤倹の婦徳をほめ申て、時の詩人葛覃の章を賦せしとぞ。蠶養の事は、雄略天皇の御時、いともかしこき詔おはしまして、皇后宮にも、御みづから、桑とらせ玉ひ、こがひの御業ましましき。近は、皇后宮皇大后宮のやんごとなく渡らせ玉ふ御邊りにも、宮のうちに、蠶飼せさせて見そなはせ給ひし御事の世にも聞えて、坤徳のすぐれさせ玉ふを人、皆、稱へ奉りぬ。また乘輿上野の國に行幸せさせ玉ひ、糸繰る場に臨ませおはしまして、里の乙女が、手業を見そなはし數々の祿を賜せられ、また兩宮行啓の御時も、御車をよせられしにぞ、心なき賤の男賤の女に至るまで、上代にも例しなきおほきおほんめぐみの忝けなさを荒拷の、せばき袂につゝみあへず、祝びのなみだ落しけるも多かりしとぞ聞えける。異國にしては、清帝の后は年毎に先蠶の神をまつらせられ、親ら妃嬪、公主、福晉夫人命婦を召し具せられ、桑採り、繭作らせさせて、織殿に入り玉ひみづから糸を繰り、種々の色に染なさせて郊廟の幣帛、帝の服御の料に供へらるとぞ承る。かく尊き御身にても、女工の事に御心をつくさせ玉ふはみな諸の婦女をして、其の本分をな怠りそとの御敎ぞかし。あはれ、天が下の女子らよ。かゝるおほん恵の忝けなさを、あだにな思ひ奉りそ。

他山の石

岐蘇　小東洋子譯

(二)マリーワシントン(イ)

有名なるワシントンの母が、猶、一層長命して、ワシントンの、社會の大人の地位を得し迄、彼の

始終を共にしたらんには、歴史上、世人に熟知せらるゝもの、決して鮮少にあらざるべきに、斯くあらざりし故ワシントンの、妻の歴史と比格せば、只、僅々の出來事の外、今日に傳はらず、ワシントンの傳記中には、母の生涯、其の死、及アンドリウジャクソン氏が、大統領の時代に、彼の女の紀念の爲め、ワシントン府に建設せられたる、紀念碑等に關して、記する事の外なく、其の平素を窺ふ能はず。マリーが、其の子息に與へたる手紙は、一も殘されざるのみならず、後年に於けるワシントンの友人の、多くは、嘗て、母に面會したる事なしと、傳へらるゝを見れば、此の偉婦人の事蹟を、明かに知る能はざるなり。

マリーは、八十三才の幸福なる高齢を以て、此の世を去れり。其の死去前、半世紀に於いて、ワシントンは、世界歴史に於いて、空前絶後とも言ふ可き、最も大なる活劇にして、青史以來の緊要なる大事件、米國獨立戰爭に、於いて、最大なる活劇者にてありき。彼れは、清楚なる品性を有し、自然の才能ある婦人なりしは、社會の風潮事變に對し、最も慧眼卓識の先見家なりしと、賞するも敢て爭ふ可からず。ワシントンが測量手の職に從事せし時又は、バルヂニア軍隊に士官の職を奉せし時、又は、革命戰爭の際六年間戰場にありし時も、母とワシントン間の通信は、互ひに怠る事なくして、之れを以て、一の日課となせり、然るに其の手紙が、一も殖民時代に於ける、有名なる歴史中にあらはれて、光彩を放たざるは、實に遺憾の極みにして、爲めに、今日の青年諸士が、彼の品性を充分研究するの材料を得ざる事は、實に修生の恨事なり。

彼は、「献身的精神を以てなす、嚴粛なる事業より、

他に愉快、又、苦痛なしと、言へる、デトクイピル氏の生涯上の定義を實行したる人にして、克已自助の主義の上に立つ沈靜嚴肅なる婦人なりき。四十六年間の寡婦生涯に於いて、一人の補助者を要せずして、家産と田園とを處理し必要の材能と尊貴なる品性とを備ふる人物に子息等を養育し遂げんがために、社會の慘苦を嘗めしめんとして、社會に旅立ちせり。彼が子息、及び、世人に尊敬せられ、凡ての事件に付き、參議と裁斷とに與れるは、彼女の價値と才能とある證なり。

ワシントンの母が個人的大望を抱かさると、自然の遠慮深き性質は、彼の女に付て、世人が、賞讃を表はさんとする時に於てさへも、社會に名を知られて、持て噺さるゝを嫌ひしなり。之には、別に證明の必要なきも、玆に彼が子息、ワシントンと共に、公衆の前にあらはれし、只一の例あり。

ロードヱルトンヲルス敗戰後、ワシントンは、從者と、數多の有名なる軍人に同伴せられて、フレデリクスボルクに行きし時なりき、大舞踏會は、彼を祝するために開かれぬ、尊敬すべき當夜の主賓として、團欒の焦點なりし老母は、幸福なるワシントンの手腕に倚りて、此處の團欒彼方の團群を逍遙せられし時、公衆に拍手喝采せられたり。彼が母に向つて、愛情、畫くが如き忠實は、彼の近隣人も、バルヂニアの人々をして、彼を愛せしめ、此の公會に於けるワシントンの受けし、光榮は、一層離れたり。之、只に國者のみならず、一の男兒としても、偉大なる人物なるを、公衆に承認せられたりしなり。(未完)

斧のえ（四）

松竹荘主人寄贈
荒木田麗女遺稿

君はおびえて、毛もいよだちそゝろさむきまでおそろしう心もまどへば、とみににげていでたまひ、たてしとみのもとにたちかくれ、おともせでおはす。後達はおどろきて、しもなるものはりまゐり、をのこは、松ともしつれて、すけの殿おはしまさぬほとにて、いとふびんなり。かへらせ給はば、我らがおこたりにこそさいなまれめと、おぢまどひたるかほつきして、ものゝくま〳〵あさりもとむめり。君は、見やつくると、すゝろはしきに、道定心あるものなれば、とく見つけ奉り、人々のゆきちがふまよひに、門のほかに、ゐてたてまつれりしかば、からうして、かへり給ひぬ。

君たゞおそろしき夢のこゝちして、むねうちさわぎ、あせもしどゝにて、物もおぼえず、わなゝかれ給ふ。殿におはしてぞ、やう〳〵に、心もつきたまふ。さても、めづらかなる目をも見けりな。何に、こゝら、心をうごかして、文をもかよはしけむと、我ながら淺ましう、くやしなどもいへば世のつねなり。北の方のさかしだちけるも、又聞いれざりしもうべなりけりとて、返す〳〵あやなかりける、世の人のことよ。僞も似つきてこそすれ。殿のうへに似たりなどは、いかなる夢をみし人、いひはしめけるにや。これをこそさかでとにはいはめ、あの御おもてふせにもこそあれと、うちうめかれ給ひ、われも物こりして、思す人のがり聞んことのわりなきまゝに、道定にもと、この山と口かため給ふ。さはいへど、ほどへては、かくれなく世中にきこえあへるに、あやしがる人々

おほくて、さばかりたぐひなく、なまめかしうおはするを、ぬす人などの、しりしは、世にうつし心にはあらじ、物くるはしかりけりとわらふ。心ある人は、いてあらじ、三位の君かほをさしいて給はむにも、いかなる夷心のさかなさなりとも、あの御ひかりをなへてに思はんやは。かならずこゝろもまどひぬべし。たけしとてもをんななり。ろなうはづかしと思ひぬべきを。さるしな〳〵しからぬわたりなれば、君ふかうよういし給ひ、御かほをもかくして、御よそひもあらぬさまに、やつし給ふればなん、よのつねのをのこの姿とばかり見まゐらせて、さるさがれものは、いちはやき心のまゝに、ためらふこともなかりしこそなど、聞えあつかふ。後には、三位君さへ、人にもかたりいで給ひ、そのをりは、たちまちにくはるゝにやと、鬼ひと口の心ちこそしつれとわらひ給ひしとよ。行幸には、君達、とり〳〵にいとみかはして、しつくしたまへる、よそひのいづれとなくあざやかに、なまめかしう、にほはしき中に、三位中將、人からに、もてはやされたるさうそくは、おなじものとも見えず、今日は、いてはへもことさらにて、神もそらにめでぬべく、ゆゝしきまでなり。所々のさんじきまへわたりのはれ〳〵しきに、物見車は、道もさりあへず、よろしき女車、あまたたてつゞけたれば、君達も、あいなう心づかひせられ給ふ。野山のみどりわかやかに、そらの色さへたゞならず、春秋のながめには、おとるまじうおもしろきをりのことゝて、親王達、大臣達をはじめ、我も〳〵とつかふまつり給へば、世にのこる人あらじと見るばかり、つどひ給ひ、御儀式いとめでたくて、わたらせ給ふ。御社におはしましつきて、神寳かず〳〵にうるはしう

たて丶奉らせたまひ、とり〳〵なる舞のさまも、神さびて、物の音も、いとおもしろく、峯の松風に聲をかはし、瀧の水にきほひて、すみまされり。三のともし火は、あきらけき世のひかりにて、しげりあふ杉の青葉は、ときはに、さかえますべき君か代のしるしなるいといみじ。三位中將は、心にこめて、わすれがたきことをも、かつ〳〵神に申さまほしく、社のかずを、人とはむなどいはれ給ふ。御遊はて丶、御前もしめやかなれば、君達もすべりいでて、左の大殿の三位中將、右の大殿の宰相中將、内の大殿の宰相などうちつれて、山の方にうそふきありき給ふ。三位中將は、おほせごとありて、御前にさむらひたまひけるが、しばしおくれて、たちたまひ、さきの君達たづね給へど、見えたまはねば、山にやのぼり給へるとて、したひゆき給ふ。杉間わけ入るま丶に、見わたせば、山の梢ども、一つ若葉の色うるはしうな丶めなる日にむかひて、風にうちなび〳〵ひかりも、似るものなく涼しげに、花は殘りもなき頃なれど、櫻は、それとしらせかはなる。あさみどりも、なべてならず、末葉のくれなゐに、色づきたる、ことに、なまめかしう若楓の同じいろにて、枝かはしたるは、秋のちしほも、わする丶ばかり、いとめづらしく、峯にか丶れる白雲も、まだ夏の色ふか丶らねば、あやしき峰とは、見えず。たゞ白妙の衣ほせるとおぼゆるやうに、むら〳〵なびきたり。霞は、雲に、そらも、とく衣かへして、日影も塵のくもりなく、きよくやはらぐ風のけはひに、むら鳥のたかく飛めぐり、心ちよげに、なきかはしたるさへおもしろし。

水鳥の青はをうつす梢とて、山は夏さへ涼しかりけり」羅帷卷却してと、口すさみて、なほ深く

いり給ふに、しげみのおくには、郭公もなきたり。あまひこのこたふるさへ、なさけありて、今一聲も、せちにゆかしう休らはれ給ふ。わたはらより、老樹を埋む空、山のうちとねびたる聲していへば、おどろきてふりかへりたるに、六十ばかりのおきなの、岩のたゝみに、苔をむしろにて、磐をする、たゞ二人さしむかひて、碁のうちゐたり。いとあやしう、今日の行幸をしらぬ人もありけり。櫻の花ならずとも、わか葉の色にもしるからんものをと、うちつぶやきつゝ、とばかり見たちたまふ。二人は、あから目もせず、げにかくおもしろき手をこそは、むかしもめでつらめと、いひかはして、かたはらに見る人ありともしらず、あらそひに心いれたり。

（未完）

茶話指月集

河東　散人鵜巣

寄稿者　孤峰庵不美

不美曰く、此の茶話指月集は、千宗旦門人藤村庸軒、常々門弟子等に訓話せられたるを、某氏書紀し置ける儘に、積で一冊子とは成たるなり。庸軒先生は、宗旦門人中にも、高弟にて、廣く文を學び、詩文章に通達し、生質温厚篤實にして、英雄の風彩あり。平素清閑淡薄を好み、旦翁に茶道を學び、竟に温奥を極むる至る。翁大に嘉みして、特に深愛す。軒翁は、家産に富饒して、旦翁の内部をも資補せられしと。其の德義追慕せずんばあるべからず。自作せられし、花入茶杓の類も、氣骨偉大にして、何流の人を不レ論、此の人の作を賞歎す。茶杓の詩銘

は、其の中稀にして、非常に、是を尊び、持手囃子、人多し、其の他の發明種々無量なれども、香合の回也、竹の中次は、茶人社會に大騒ぎするものなり。婦人、令嬢諸君には、此の話談は、或は、不適當かも不レ可レ知、大に老子の掛念する所なれ共、追々婦人社會の論議も面倒に八釜敷、維新前の如く、婦人家居斗に引籠て無責任で居らッしやる譯には往ません。自然御敎育も、立派に御受成被レ學校も、皆御卒業の社會と成たれば、夫に伴なはれて、御見識も、追追、高尚に成升から御嗜の一技、茶道も、手前斗に無レ之指月の一話位は出さして、御貰申さなければ興がありません。是丈は、愛觀の皆様に願ひ置升。

自叙

本朝祭禮の行るゝことを伺し。贈相國喜山公眞能が傳を得たまひしよりこのかた、殊光紹鷗に委く、利休に大成するものならし。唐に陸東崗廉玉川かたくひ茶を賞する人なきにしもあらねど、いまだ賓主禮讓の祭會有ことを聞ず。今、昇平の御代、なほ、盛んに行る。頃茶道の正傳をはかるに、その支流いづれを是とし、いづれをか非とせん。近近は、唯休が孫千宗旦(號ニ元伯一)といふ人あり。生涯利門名路に奔ず、常に窓簾をたれて、清味を甘こと已に七十餘年雪のあした、月の夕、興いたる時は、茶友を招き、興つくる時は、獨座す。偶、此の道を問人あれば、答へていはく、本來禪によるが故に、更に示べき道もなし。但、我が平生かたり傳ふ古人の茶話を以て、指月とせば、おのづから得ることあらんと。かの京極黄門和歌、無ニ師匠一只以ニ舊歌一爲レ師と、のたまひしも、道異にして、理は同じかるべし。爰に、藤村庸軒(號反古

庵〕年來旦翁に聞ところの清譚口づから余に、又、つたふ。余も、亦、若かりし時、翁の茶席につらなる。因てこれかれ聞まゝに、しるしとめて、久しく、書筬にかくす。今、茲、元祿丁丑の秋、ひとりの少年來て、乞て袖にし歸る。猶、同參の人ありて、傳へて話中のおもむきを了せば、翁の指月、豈末とほくてらさざらんや。

左の一篇は、亡友清瀨元太郎君の關西旅行中に、筆を執り、予等同人に寄せしものにして、時、實に本年四月の交なりき。其の後程もなく、彼は病を得て、故山に皈臥し、終に七月中旬を以て、白玉樓中の人となり、空しく遺稿の名を齎らしむるに至らしめぬ。而して彼は、本篇の末尾にゆめ大方に示すべきものあらず」と記るし置きたれば之を公にするは、或は、故人の志に負かんなれども、予は、又之をして、空しく、予が筐底に蠹魚の友たらしむるに忍びず、出して、以て、女鑑記者の寄す讀者諸媛も、亦それこの意を諒せられよかし。

竹傷春手記

歌の調

清瀨元太郎

小生等に研究せしところにては、詩歌は、何れの國にても、最も早く起りたる文學にて、其の最初の要求は調にありしこと勿論の義に候。今日一丁字を解せざる人々が、多くの和歌を暗誦する如く太古の人は、文字無き時代より、一種の節調によりて、多くの傳説を傳へ候が、やがてこれ詩歌に有之候、されば、苟も、斯學の發達せしところには、節調をとゝのふる爲に、終に、一種の形式

起り、或は、平仄となり、或は押韻となり、或は支那の絶句の如き、我が和歌の如き、文字の數に制限をさへ附する樣に相成申候、かくの如くにして、起りたる形式が、支那の如く、字々特殊の意義を有する文字國、或は、內容を重んじて漸く、外形を輕んぜむとする傾向ある、歐洲の詩の如きすら、其の巧拙に關しては、矢張批判の主なる標準となり居ることは、至當の義にて、早く申さば此の形式を外にしては、狹義に詩なるものは、全く無之事と相成候、即ち、節調だに整ひ居らば、內容は、如何に貧くとも、詩歌の詩歌たるを妨けざれども、これと、反對にて、內容は、如何に豐富なるも、此の節調なくては、全然詩歌以外のものに御座候、之を要するに、詩歌は、美の約束を脫すること能はず。而して、其の美の第一義は、節調に有之次第に候。

我が國は昔より、言靈のさきはふ國と稱へ、語音淸朗にして、拗音濁音少く、おのづから、一種の調を有するが故に、古來歌人にあらざる人の詠歌多きが如く、其の性質は普及的にて、形式の如きも、他の歐州支那の如く押韻平仄に、千變萬化の規則を有するには似ず、僅に、五七と云へる、一種の調を有するのみにて、中古よりは、文字の上に、三十一字の制限を生せし外何等の煩雜なる形式なく、全く、自由自在にて、毫も、羈束せらるる所無之候。併乍、この自由自在にて、形式なく羈束なきは一見和歌の大に作り易きが如くなれども、事實は、正反對にて、形式なきだけ、和歌を詠ずることは、困難なるにて候。之を譬ふれば、押韻平仄其の他、諸種の形式あるは、恰も、紙面に細罫あるが如く、一字々々、其の罫に嵌入すれば、足れども、一定の形式なきは、純白なる、大

漆書に筆を下すが如く、其の難易は却て、同日の談にあらず候。

かくの如く、何等の規則なく、只だ、文字の上に字數の制限のみを受けたる、和歌が、到底望んで得べからざる內容の豐富を捨てゝ、專ら調の上に全力を注ぎたるは當然の順席に候、古來名歌として稱讃せらるゝものを見ても、直に合點參るべく『田子の浦ゆ打出でみれば眞白にぞ富士の高峰に雪は降りける』これ內容に於て、何等の奇か候べき、田夫野人の頭にも宿るべき想にして、而も斯かる名歌となりしこそ、偏に調の上に一種神秘の力あるに外ならず候、『秋風にたゞよふ雲の絶間よりもれいづる月の影のさやけさ』眼前に、其の光景髣髴として、無限の感慨に堪へざらしむるも而も其の想は、甚だ及び難しとせず。只だ調や及ぶべからず候、かくの如く論じ候へば、或は、想は、全く和歌の巧拙に關係なきが、如くなれど、左樣に極端に奔りては、却て、本意に反き候、只だ古來の名歌は、主として、調の上にあれど、調だにとゝなひなば、想に自ら叶ふやう相成るを常と致候。即ち輕重は、其の間に存じて、決して動かざるものに有之候。歐洲支那の詩は、節調と內容と、二つながら重んじたれども、字句に制限なかりしと、豐富なる思想を容るゝに足るの形式を有せしより、其の結果自然に重きを內容に置くに至りしも、我が國は、早くより、長歌癈たれ、短歌のみ發達して、複雜なる思想を歌ふ能はざる所より、自然に內容を輕んじて、主力を調の上に注ぐに至りしは、注意すべき價値ありと信じ候。而して、千載新古今時代に至り、一ト節異なれるを詠まんとて、想に重きを置きてより、和歌は、却て、萎靡不振に流れしも、大に注意すべき事項に候。

冠置字の歌

山岡螢雪

國あれば、必ず人あり、人あれば、必らず言語あり歌謠あるは、いづれの國も皆同く、特更に、いはずもがな。

わけて、言靈の幸ふ、我が國のことにしあれや、文學の基礎も、言語、歌謠より成立ちしものにて、其の起因とする處、いと古く、神代の昔、諾冊陰陽の二尊まし〳〵て、天の御柱を左右より旋り玉ひし時、妍哉云々と、互にのり給ふ。これぞ言語の初めなる。

歌は、上古、素盞嗚尊の、出雲國須賀に、宮居給ひし時、そこより、雲の立ち登れば、

夜久毛多都、伊豆毛夜幣賀岐、都麻非微爾、
夜幣賀岐都久流、曾能夜幣賀岐袁、

と謠ひ給ひて、後世、短歌てふ、三十一文字の道を、開き玉へり。

又、長歌の初めと云へば、世俗の普く、大黑天とて、福の神とし祭り奉る、大國主尊、即ち、八千矛神が、嘗て、高志の國の、沼河比賣を、訪いたまひし時、その家に到り玉ひて、

夜知富許能、迦微能美許登波、
夜斯麻久爾、都麻々岐迦泥弖、
登富登富斯、故志能久邇々、
佐加志賣遠、阿理登岐加志弖、

云々と、詠み給ひしものにて、此らより、祝詞、壽詞の類も起り、いつとはなく、次第におし弘まりて、持統の御代には、彼の名細しき、柿本人麿、阿部赤人などの、やんごとなき、歌聖を始めとし、奈良の朝に至りては、進運其の極に達し、歌仙と稱らるゝもの、さながら雨後の筍の如く、

輩出して、玆に、異國には、絕て無き、敷島の和歌の、麗しき花を咲かせ、萬葉集てふ、いとも、尊き、完美なる實を、結ばしむるにぞ至りたる。

されば、一代の名手の喜びては歌ひ、悲みては詠じ、或は、花に月に、草に虫に、鳥に獸に、いづれも、歌の料とならざるはなく、更に、神韻縹渺たる、山紫水明に遊び、天然の美觀、神に徹しては、坐ろに吟詠、口をついで出て、天眞爛熳なる秀歌も、最多く、今尙世に傳はりぬ。

而して、一種の風雅なる遊戲的に流れては、吾れ勞らじと、各、競ひて智をたゝかはし、才を爭ふものから、諷詠もさま〴〵の體となり、平安の朝にうつりては、旋頭歌、廻文、物名、折句、沓冠、さては歌曲、今樣など、別るゝに至れり。

抑、この冠置字の歌は、折句、沓冠などより、脫化したるものにて、素、沓冠のかむりのみなるもの、あらかじめ、歌の頭に定めたる文字を置きて、詠める者なり。今は昔、天曆の頃とかや、大中臣能宣卿等と、勅を奉じて、後撰和歌集、及、萬葉集訓點などを、編みたる歌仙、源　順が、其の家集に傳へたる、あめつちの歌四十八首、ならびに、兼好、慶雲、淨辨等とならびて、和歌の四天王と、たゝへられたる、頓阿法師の、やがて、都を後に遙々高野山に登り、開山弘法大師が作てふ、いろは四十八文字を、歌の頭に置きて詠み、影前に供へたりと、高野日記に見えたる、其等こそ此の歌の初めならめ。

時に、法樂の和歌てふすさみ、まゝ行はれたり。こは、素、佛を祭るための音樂を、云ひたる言葉なれども、轉じて、都ての神、佛に手向なす業、すなはち、法樂の和歌、法樂の能など、云ふに至り、再轉しては、遊び、なぐさみ、所謂、放樂と

ぞなりにける。

今を去ること、凡、四百三十餘年の昔、後花園の御代寛正六年の此の頃、参議姉小路權中納言基綱卿が、小一條左大臣師尹朝臣と、春日神社に参詣たまひしをり、ものせられたる和文記事の、春日社参記に、「なむかすがのだいみやうしむ」といふ事を、一文字づゝ、五文字の頭に置きて、十三首の法樂をなん詠み出で給ひしこと、見えたり。即ち、

秋天象

●ながめつゝ更ればいとゞ澄みまさる
　こゝろやつきの光なるらん

○

●むら雲のゆきゝをはやみ時雨きて
　野分になりぬあきの暮がた

秋地儀

●かぎりなくあふぐ心のいろと見よ
　みかさの山の秋のちしほを

○

●すきがてにながめてけりな春日野の
　おどろの露の秋のさかりを

秋植物

●かぜすさぶ草木はあれど萩ばかり
　そよや秋ぞと聞くべきぞ秋

○

●のこしおかん秋のかたみに唐錦
　枝にひとむら薄きいろ哉

秋動物

●たちまよふ霧のまぎれにくる雁や
　はなれぬつらも絶間みゆ覧

○

●いとゞしく男鹿の聲のあはれさも

ことしの秋の旅寐にぞしる

秋雜物

●みのよるべ神はしらせよ佐保川の
まりの朝げにまよふ捨舟

○

●やまのはの月を東にいそげとや
この大寺の入あひの鐘

秋人事

●うき事をなにぞといはゞ答へまし
とはれぬ秋の夕ぐれの空

○

●しるやいかに寐てもさめても秋の夜の
ながきおもひを神にまかすと

○

●むすびおきし契やながき神と君と
代々にまちみる秋の手向は

と、卿がこの志、自、記したまふに。ひとへに題の心を思ひて、ありのまゝにいひいだしぬるにも侍らず、みことゞを飾り、心をたくみて思ひしづめるにもあらず、たゞ天の下、靜に、君が代を長く久しくと思ひ、または、數ならぬうき身を憂へて、行く末を神にまかせて、うきをもよろこばしきをも、共にいひあらはせるばかりにて侍れば、歌の姿にめで給ふべきよしも侍らねど、志の深き色に詞の花なきを忘れて侍りぬ。いはぬ心のうきをも、そらに照覽あるべきとなれど、兎角すます心すゝめられて、身の昔、身の行末、思ひ出すふしをぞ、からのやうに、かきつけ侍りぬ。といはれたる、實にその如くなりけむかし。かゝる歌には、めでたきものいと尠く、大方は、見るに足るべきものなけれども、卿が、敬神愛國の志、自然に筆の上にあらはれ、最も床しく、

思はゆるかな。

其の他、從一位權大納言中御門宣胤卿が、其の記に載せ給ひたる、置字の歌に、春日大明神てふ五文字を、折句の如く、句毎の首におきて、

春がやま日ごとにいのる大ぬさを
明らかにみよ神しまもらば、

と詠み給ひたる、かゝる種々のためし、いと多けれど、さまではと思ひ、わざとはぶきたれば、是等にて、冠置字のさま、悟り玉ひてよ。

あはれ諸媛よ、梧桐一葉庭に零ち、金風颯々として、天が下殘り隅なき秋とはなり、いつしか中秋の觀月も過ぎ、今はゝや、一雨ごとに、のこんの暑やう〳〵うすらぎ、山は皆、錦織りなす紅葉、彌生の花よりも、實に麗しく、處得顔に咲き匂ふ七草の、野邊の景色もあはれなる、夕まぐれ、覺束なくも葉末の露に宿る、月の涼しさ、清氣骨に入りていよゝ爽に、蚊も又、たえて、書よみ勵む、好個の時季とはなりぬ。

されば、新しく張りかへられたる、紙障子の窓の下、螢か雪か、今は求むるよしもなけれど、光は美しく、文なせるランプ明らかに、文机に對ひ、日課の學びもをへて、夜長の徒然に、かゝる歌のすさみなどし、玉はんには、興味ふかく、自ら、人品も高く、心も須賀々々しくなりて、最も、甲斐ある放樂にこそ。

大和めぐり（承前）

井上頼文

頼文いはく。此寺の門を出で、數町行けば、田圃の間に、神代土器の破片あり。こは、例の人類學者、證古學者がいふ朝鮮土器なり、此の破片のせ

めて一片だに、かの三窟中にあらむ、年代を考ふるたよりともなりなましをなど思ひつゝ、そこら見わたせば、證古家のいふ、さげつぼ、もだひ、勾玉つぼ、ほだり、まるほだり、かたくちほだり、有口土器、よこうす、ひらさら、かたさら、たかつき、くぼつき、こつきの類の破片なり。此のあたりは、稚櫻の宮の宮址にも近ければ、その頃の遺物にやあらん。おりたちて、ひとひら、ふたひら、拾はまくすれど、行くてを急ぎ、かけ足して進むをりなれば、せんすべなし。いとまあらば、鳥見山あたりよりはじめて、天の香山、などに遺れる千古の破片を採集せまほしきわざなり。歴史よまん人の利益となる事多かるべし。さるにても、かゝる土器を見ては、一も二もなく總稱して、朝鮮土器と號け、飴色の勾玉を見ては、直に、印度玉と稱するは、人類學家、證古學家が、普通名詞なれど、かくいへば、わが祖先は、印度、朝鮮の支流の如く聞えて、甚よからぬ名稱なり。この名稱によりて、少年學生を大に誤らしむることなしといふべからず。識者たるもの、注意せずして可ならんや。

崇峻天皇陵

陵圖考に、高十三間、廻は十三間、垣廻四十三間、中に石棺あり。高三尺八寸、長八尺、横三尺七寸、厚九寸、錬石なり。岩屋の內、一間半。と見えたれば、そのかみ早くより、發掘せられたる事と覺ゆ。かしこしともかしこきことならずや。

皇居たりし、柴垣宮の舊址は、今大字倉梯、字天王屋敷（崇峻天皇御陵遙拜所と云ふ處、むかしの金福寺の跡なりといふ）といへるが、皇居の一部なりと、また、この天皇屋敷より、南の方八町餘

に、今井谷といふ地あり。そこに、みくるかへしなどいふ名稱のこれりといふ。

この御陵の側を流るゝ溪水いときよし。歌もて名高きある大人の歌に、ぬば玉のくらはし川に千鳥なくなり、と詠まれし處なり。されど、蛙こそなけ。千鳥は住むべき流にあらず。げに、もゝたび聞くは、ひとたび見るにしかずとは、かゝる類ならんかし。されば、こたびの旅行の必要は、ます〳〵いちじろく、文よみて古昔考ふるたすけは、いといやちこなり。こを見ん姫たちよ、修學旅行の功は、この日記にあらはれたる筆のあとのみとな思ひたまひそ。筆にも、ことばにもかけておよばぬ知識は、人々のかしらにのこりて、おほきなる學びのたすけとなりけるものを。

この倉橋村の東方にそびえたる山は、仁德天皇の御宇、伊勢の方にのがれたまはんとて速總別王が、女鳥王の御手を取らして、

　はしたての　くらはしやまを
　さかしみと　いはかきかねて
　わかてとらすも

また

　はしたての　くらはしやまは
　さかしけど　いもとのぼれは
　さかしくもあらず

と、うたひ給ひし山は、この山なりとぞ。竹の園生におひたちて、荒き風にもあてられたまはざりし二はしらのみこが、御心のまどひとはいへ、賤山がつも越えなやむ、鳥路幽徑にさすらへさせたまへる當時のさまをおしはかりまつりて、

　いはかきかねて　いもとせが
　たまでまたまで　さしかはし

こえなやまし丶　はしたての
くらはしやまこそ　あはれなれ

また

のぼりなやみて　とふとりの
つはさもかもと　なけきけむ
なけきのきりか　はしたての
くらはしやまこそ　くもるなれ

閒人宿禰大浦が、

くらはしの山をたかみかよごもりに
　いでくるつきのひかりともしき

と、よめるも、この山なりと。おのれたはむれに

よごもりにいでくる月をまちかねて
　くらはし山とよひそめにけむ

くらはしの山の山人こゝろあらば
　月にさはらふ桂をりとれ

ぬは玉のくらはし山となつけしは
　月にくまなす故にかあるらむ

柴垣宮の御事ども身にしみて

あきらけき月のひかりもくらはしの
　くらまされたるよこそつらけれ





曉風白露紀行（承前）

白松園主人

八月十日

昨日今日は、陰暦の宇蘭盆なりとて、男女の寺に詣で、あるは親族許音づれて、亡き人の靈祭るわざなんすめる。こたびは、大津郡深川の温泉に、浴せんの心構なりしかども、さはれる事いできて、心急はしかりければ、そなたはうちやめ、かねておのれがをしへ子なる、美禰郡伊佐の本間某が、招ぐ事再三再四にして、いと懇ろなりしかばもだしがたくて、午前八時、片山氏をうち立ちぬ太田といふ處にて晝餐したゝめ、午後三時ごろに十里の道を盡して、伊佐に着きぬ。今日はいと疾かりけりと、我ながら、我が足の譽められぬ。本間生を訪はんとて、かねての知人なる、村上氏の前を過ぎけるに、村上氏わりなく呼びのぼし、先づゆあみせさせて、みきみけとうでゝ、もてなすことねんごろなり。夜に入りて、村上氏と共に、近きわたりの知るべを、悉くとぶらひありきぬ。想ひおこす、今より六年前、おのれ、此の地にさすらひ來て、半歳ばかりすぐしゝが、今は日と共に進みて、此の地もいや開けに開けて、繁華なる市となりしにつけ、をさなかりしはいと大人びて面わするゝまで成長しはられしけれど、老いたるなむ、彼もうせぬ、此も失せぬとて、けふの靈祭のわざに數へらるゝが、いとおほかりける。

▲八月十一日

本間生は、おのれの來りしことを聞きしりて、とく迎へに來りぬ。けふは必ず我が家に在りて、すぐし給へ、と村上氏は留められぬ。さらばしばし本間氏に行きて、歸り來らむと、行きぬ。本間生の母、祖父の君を始め弟妹など、擧りてあるじせらるゝ事、いはん方なく、いとも〳〵懇なり。そが中にも、父君なんまだいと若かりしに、いと早くも身まかられて、此のうちの數に見え給はぬなん、いと悲しきや。ゆふべに至り、海山くさ〴〵の御饌に、心を盡してもてなされてありけるに、村上氏、また早く歸りねと、使をもて促すこと、櫛の齒をひくが如し。即ち、本間生を從へて、行いて飲みぬ。此の日は、此の市の夏祭にて、いと賑はし。既にして村上氏等と、共に出でゝ、祭禮の行列を見などし、土豪池田氏を訪ひて、又みきを勸められ、余りに醉ひて得堪へねば、竊かに逃げ出でゝ、本間生と共に、生の家に歸りて寢ぬ

▲八月十二日

此の日も、本間生に在りて、頻りにあるじせられてありけるに、近きわたりのしるべのうちより、來り迎ふる事、幾度といふ數を知らねば、之また辭するによしなくて行きぬ。此のあるじの妹なる人は、女子師範學校の卒業生にて、在學中おれの亡き父に、敎を受けし由にて、頻りに懷舊の談は出されぬ。かゝる處へ、此の市の郵便局長なる、柳井氏は、もと一面の識あるにより、是また使して邀ふる事甚だ急なり。好意もだすによしなくて、力めて之にさへ赴きぬ。

嗚呼田舍の人士が、友情に厚きことは、概ね此の類なり、彼の朝に刺を通じて交を求め、夕には忽地路傍の人となる、功利輕薄の徒と、豈に同日の談ならむや。

▲八月十三日、十四日

十三日同じく本間氏に在り。友人野原氏、此の日東京より歸るよしを聞き。待ちつれども、遂に歸らず、相變らず本間氏の丁重なる欵待を受けて暮しぬ。十四日未明に起き出で丶、辭して歸らむとす。留むれども聞かず、さらば暫し待ち給へ、別れの盞まゐらせんといはるゝに、いなみがたく、み酒み饌思ふまゝに、うち食ひて、例の輕裝に身を固め、別を告げて出でぬ。本間生送ること數丁にして袂を別ちぬ。停原といふ處にて、伊佐村長なりし阿川氏に逢ひ、立談する事廿分にして分れ健歩して十時頃、大峠といふ難所にさしかゝりぬ此の峠の長さ二里一の坂の嶮には若かざれども、一升谷の比に非ず。その麓を町繪村といふ。柴栗を以て名高き處なり。元より山間僻陬の地なれば日常の買物に不便なる事、思ひやらる。一人の男あり。枴の兩端に籠を吊し、そが中に徳利五ッ六ッと、乾魚の鯖の類、、燒鯛の如き者を入れたるが、汗を絞りながら、擔ひ歸りたるを見て、傍なる民家より、各々走り出で、こは大方ならぬ御世話なりき、とて魚を受け取るあり、徳利を持ちて入るあり、中にも小兒等は、雀躍して、おさかなが、かへつたといひつゝ、嬉しむさまなり。こは村の人々より、此の男に托して買ひ物したるにて徳利はやがて、醬油、酢、酒の類なるべし。氏神のみ前に、幟を建てたれば、氏神の例祭にもやと思ひしが、後に聞けば、こたびの淸國事件の爲め出軍せる全村の軍人の、武運を祈るにぞありける此處にて草鞋を求め、穿きしめて登る。山の半腹に、左手のかたに碑を建てたり。之を見るに

東路に仰ぐ高嶺の面影を
うつしてこゝにみ足富士かな

文政の年江嶺、と記せり。是に於て、江嶺が發見せりといふ三足富士は、此處なることを知れり。即ち頭をめぐらして右手の方を望むに、まことや富士の形に髣髴たる山は、眼前に顯れたり。されど、此の石碑のある位置を去つて。三歩の外に出づれば、その形崩れて、また富士と見るべからず之その名のおこる所以なり。抑も江嶺といふは、此の地出身の有名なる畫工にして、藩主毛利公に召されて、抱畫師たり。殊に富士山を寫すに、妙を得たりきとぞ。足を留めて、瞻望する事しばらくにして、またのぼる。桔梗、女郎花など咲き滿ちて、野山の景色いと優なり。岩のはざまより、湧き出づる清水の、細き流となりて、萩の下葉をくゞりつゝ、花の露そふけはひの、いひしらず艶なるに、ふたゝび小笹の中にかくれて、其の影は見えずなりぬれど、潺々たる水音すめり。靜に之を眺むれば、造化の妙は奪ひ難き者なるかな。之を天女の樂を奏するに例へんか。否々なほ自然の絲竹といふ外なかるべし。行けども盡きぬ山々をのぼり下りするほどに、行きあふ人稀にして、伐木の音丁々たり。暑さ次第にはげしければ、急がぬ旅も急がれて、午後一時といふに、山口の草廬に歸りぬ。蓋し伊佐より行程七里半なりといふ。

（をはり）

思ひ出づるまゝの記（承前）

故 深山庵主人

（三）人力車

之も亦同じ年頃の事なりけらし。父に伴はれて、姉と熊野神社の水無月祭へ詣でしとなり。家よりは、六七町なれど、晝よりの疲にてや、歸りには早や歩むべうもなし。父も困り給ひけん。其の頃

只だ、二三輛ありし人力車挽く爺の、此の近邊に住みけるを頼みて、姉と我れとを乘せて、家に送らしめられき。初て乘りつる車の上の心地又、目籠のたぐひにあらず。我れは、其の夜父に請ひて買ひ貰ひたる小さき喇叭を弄びつゝ、嘻々として、姉と戯ふれ居りしが、搖らるゝ儘に何時の間にか眠りこけたる無邪氣さよ。不圖母の聲の耳に入るに驚けど、車は門邊に挽捨てられて、身は下婢に擁かれつゝあり。姉は頻りに、母と語り居られしが、我は、擁かれし儘、蚊帳に入れられて、朝明る迄、何事も知らず。

（四）川遊

十歲前後の頃は、蜻蛉釣りより、魚掬ひに移りたり。背戶の小溝に山吹の花流れて、蛙の鳴く聲、やう〳〵聞こえ初むる頃より、雨の降る日をさへ玉網を肩にして、魚掬ひに出でつ。年は一ッ二ッ上なれど、能く我が言を用ゐる友、三人ばかりありけり。之等と共に泳ぎの道をも覺え、水に潜りに行きて、手づから魚捕ふるすべをさへ心得てよりは、川の面白さ譬へん方なく、毎日、學校を終れば、直に六反川と云ふに走り行き、西の山の端花やかに夕日の影の沈み果つる迄うつゝ心もなく戯ふれ遊びけり。水まだ、うす冷たき頃木枯しの吹き初むる頃などは、目は血走り、唇は紫にかはり、顏の色は眞靑に、肌は一面に粟を生じ、がタ〳〵と打ち震るはるゝにも拘らず。陸に上りて熱き光線に身を暖めあるは、濡れ身の儘に、上より衣かぶりて、僅に溫を費ゆれば、直に、又、土橋より飛び込むを常としき。此の頃の我は、姉の笑ひ給ひし如く、白きものは齒のみにして、總身は、牛の如く黑かりけらし。夜は、姉と、一ッ蚊張に臥したるが、妹は、日なた臭しとて、甚だし

く、我を嫌ひ給へり。父は、もと大量の人にして稚き我の斯かる放逸を咎め給はず、縱に、其の思ふ如く振舞ふを許し、給ひければ、誠や、我は野生の其の如くに生ひ立ちけり。左れば、其の頃は、風邪一ッ引きたるとなく、今も骨組の太かにして、肌の色黒きは、此の川遊の形見なりかし。

我が罪耶

（上）

彦峯生

『忠ならむとすれば孝ならず、孝ならむとすれば忠ならず。あはれ、進退谷りぬとて、遂に、熊野に詣で、死を祈るに至りきと言ふ。………他の國にてだに、大義親を滅すといふ訓のありといふにあらずや。何なれば、この皇御國に生れたる人にて、而かも、賢人を以て稱せらるゝ小松内府にして、この分明なる大義には迷ひしぞ。何故に、大君の御爲、皇國のために、猶つて、力を致さゞりしぞ。或は、史筆の修飾、この賢人を毀けたるにはあらざるか。若し、然あらずして、なほ、………』

オヽ、これこれ。まだ、學校に通ふ時分に、自分ながら、あまり生意氣など、書すてたまゝ、手匣の中に秘藏ッて有ッたのが、何かのついでに、師の君の御目にとまり、女なればとて、こればかりの覺悟なくてはと、御譽にあづかッたことの有ッたが、其の御詞を思ひだすと、今更、耻しうて。

と、何か古いノート様のものを持ッて、凝然と沈思こんで居らるゝ夫人の、年頃は廿四五にもならう。少し瘠せすぎては居るが、これは、この頃の苦勞の多いためだらう。其の眉つきといひ、鼻

といひ、口もとゝいひ、こんな場合にも、其の座樣の端然として居ることゝいひ、見るからが、決して、人に侮られぬ性質を持ッて居る人らしい。が如何な憂きことの積ればにや、閉ぎがちなる睫毛を傳ッて、折々、時ならぬ雫が、膝の上におちて來ることがある。折しも、隣の室から、

松子、松子

と、さもせはしさうに呼ばれたので、重たげな顏を、其の室の方にふりむけ、一寸、眉と眉とを寄せて見たが、急に返事もでなかッた。

エ、イ、このまゝ

と何なら喞く聲におどろかされて、持ッて居る本をかたつけて、ツイと立たうとする拍子に、間の襖子を明けて、姑は、はや、松子夫人の前に坐を占めた。

年の程は、最、六十の阪を越したらうか。色の黒い、顏の角ばッた、鼻は低いが、眼のおそろしういら〳〵しげなのが、顏上に光ッて、髮ばかりは、何々院とも言はれさうな切髮なれど、極、品に乏しい、意地の惡さうな人である。

坐睡して居なさるのか。………また、泣かれたさうなが、私の家には、何も不吉な事はない筈だ。延喜でもない朝からの涙三昧。ちと注意ましやれ。

と、先づ以つて、がみつかれたので、松子夫人は、いよ〳〵度を失ッた。姑は、ジロリと一睨ねめまわして、

ネイ、お前さんの御家は、今日びでこそ、其の日の御米にも御困りなさうなが、御先祖も御高名方だし、御代々歷乎とした御家柄で、廣い東京でも有數の富豪でお有んなすッたのだ。私の家なんぞは、根からの土百姓サ。倅だとても、アンナえらい大學校を卒業して、學士といふ難有お位をもらッて

も、根が百姓の子だから、二人曳の御車に乗ッて、御勤したからッて、こゝ二三年で大臣様にもなれまいし、ハイお前さんの御家などゝは比例にはなりません。が朝晩毎日一つ家に居るのに。どうか、今の學校の訓は然様したものか知らぬが、さう始終、昔の御身分を鼻におかけあそばして、から御輕蔑あそばしてばかり御出になッては、

と、この時甚く眼をひからして、なにか言はうとする時、下方の障子をあけて、御出入の小間物屋が參上した。

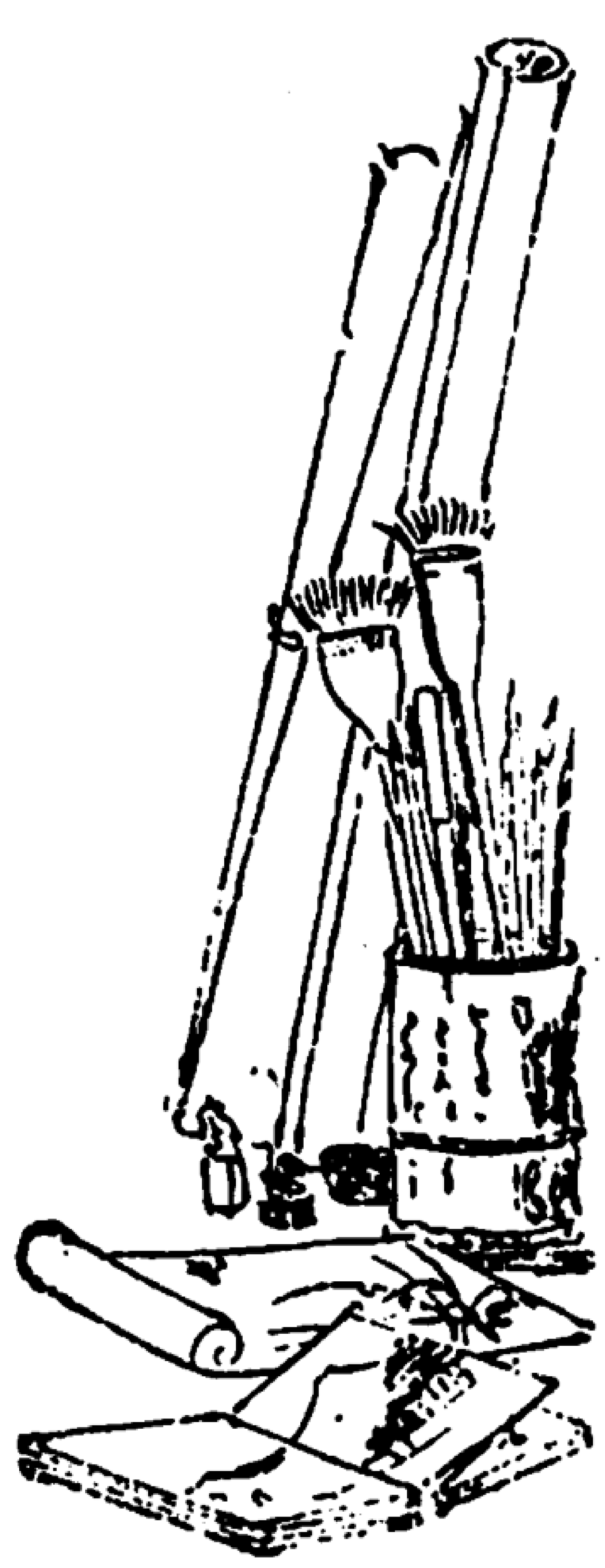
オ、オウ、ようこそ。お天氣つゞきでお仕合じやの。アノ、松子や。

と、然もなつかしさうに聲づくッて

ふでか鐵かよんで。ソレ、甘味かッたの。お彼岸の御萩餅、彼を小間物屋に、それから、お茶もいれさして下さい。今日は、何か欲しいものはないかの。

と、其の白々しさ、古狐のお化かとおやしまるばかり。これも、彼の、おもひやりのある御やさしい御姑様の、御機嫌とれぬ御嫁御はと言はせたいばかりに、出入の者や召仕の者への御慈悲お情とは、なんぼう、かたじけなき次第ならずや。

松子夫人は、これを機會に勝手の方へ往ッたが、あはれや、十間ともない廊下の間に、襦袢の袖は、最早、しぼるばかりであッた。





文林

寝覺に虫を聞く　東久世通禧

老か身はねさめかちなる秋の夜の
うきをかたらふ虫のこゑかな

月明らかなる夜友來れり　高崎正風

門たゝく音そきこゆるひとりして
みんはさひしとおもふ月夜に

曉露　津輕承昭

月おちて今しらみゆくには見れは
つゆのやとらぬ草なかりけり

欲出月　長岡護美

暮るゝ夜の雲まわらはに成にけり
いまかみゆらんやまのはの月

月下海　前田利鬯

山のはにいまみえそむる月かけを
まねくに似たる花すゝき哉

朝秋風　水野忠敬

あさはらけおりたつ庭の小萩原
身にしむはかり秋かせそふく

あてなるもの　岡部譲

かくやひめその面かけもしのはれて
月のうてなにたつ人やたれ

竹間月　宮地嚴夫

我が窓のひとむらたけのひまもりて
さしくる月のかけのさやけさ

夜虫　北郷久政

夕月のかけになきたつ虫の音を
そゝろあるきにきく夜なり鳧

海上鴈　植松有經

飛鴈のつはさになみのかゝるまて
かせふきわるゝ住よしのはま

庭秋草　鎌田正夫

いたつらにしけるとみえし庭草も
大かたはなになれるわきかな

池上月　岩崎勝從

池の面のうき藻もみえて築山を
はなれし月のかけのさやけさ

日向國下方村の孝女そめが傳をよみて　佐々豊水

やく鹽のからき世わたりなかなかに
親につくししをとめてわはれ

女郎花多　三輪義方

くちなしの色ぞかはらぬをみなへし
こゝろこゝろのほどはしらねど

旅宿鹿　蜂須賀随子

旅ころもひとりね覺るまくらへに
をしかもつまやこひて鳴らん

臥見月　近衛貞子

さす月はものに隠れてふけたれと
影はかりみんねやのうちにて

會友見月　鍋島榮子

むつましき友うち集ひうきくもの
掛らぬそらのつきをみる哉

曉月　前田朗子

たちれはふ夜霧はれゆくおほ空に
影しらむなりありあけの月

故郷擣衣　小池道子

すむ人もわらしと思ひしふるさとの
浅茅か原にころもうつなり

湖上月　保料節子

はる〴〵ときり晴初てあきのよの
　月かけにほふにほのうみつら

秋雨　松平健子

山畑のぬかこにほれてあきの雨の
　ふる日はことに淋しかりけり

雨後月　三宅龍子

雨雲のあしはやくしてつきかけを
　またもおふかとみゆる空かな

初昇月　鶴久子

我が門のやなきのひまにみいてけり
　ありとはかりのゆふ月のかけ

航路月　宮地小東洋子

夜をこめて大海はらをゆくふねの
　みちのたよりは秋の夜のつき

秋の歌　小西甚之助

此の程富士山に鶴來りて巣へるに古より豐穰の兆なりとて人々喜びあへる由きゝければ

豐年のしるしと田鶴の富士か根に
　なほ毛ころもの雪そかさぬる

ふしか根に舞ふたづや見ん大八州
　垂り穗の浪にのぼる朝日を

不二の山聲もたかねに友鶴の
　豐けき秋をほきかはすらん

社日

うんかてふ出とりをへて田つくりの
　わづかに肩を伸ばすけふかな

里の子か群れて皷をうちそとに
　聲にきはしき神の森〳〵

稲毛日記（承前）

石摶千亦

日のくれぬほどに皈らむとおきてたりしも、一汽車おくらせて、八時半といふに出立ちぬ。汐いまだひかず、月さへのぼりて、錦をおるが如き海原は、晝よりもげにけしきことなり。

沖べさして出ゆく舟を見おくれば　碩
いそやまゝつに月さしのぼる　千亦
里の子が遊びし野邊はくれはてゝ　信綱
ともし火一つ見えそめにけり　貞三
けふの日は樂しかりけり別るべき　貞三
明日のなげきをしばし忘れて　信綱
殊更にたのしくけふをくらさまし　信綱
二たびけふのあらじと思へば　千亦
いかにせむ哀いかにせむけふの日も　岸子
月いづるまではやなりにけり　千亦
日は入りぬ月はのぼりぬ同じくは　碩
月のうたよまむ日の昇るまで　千亦

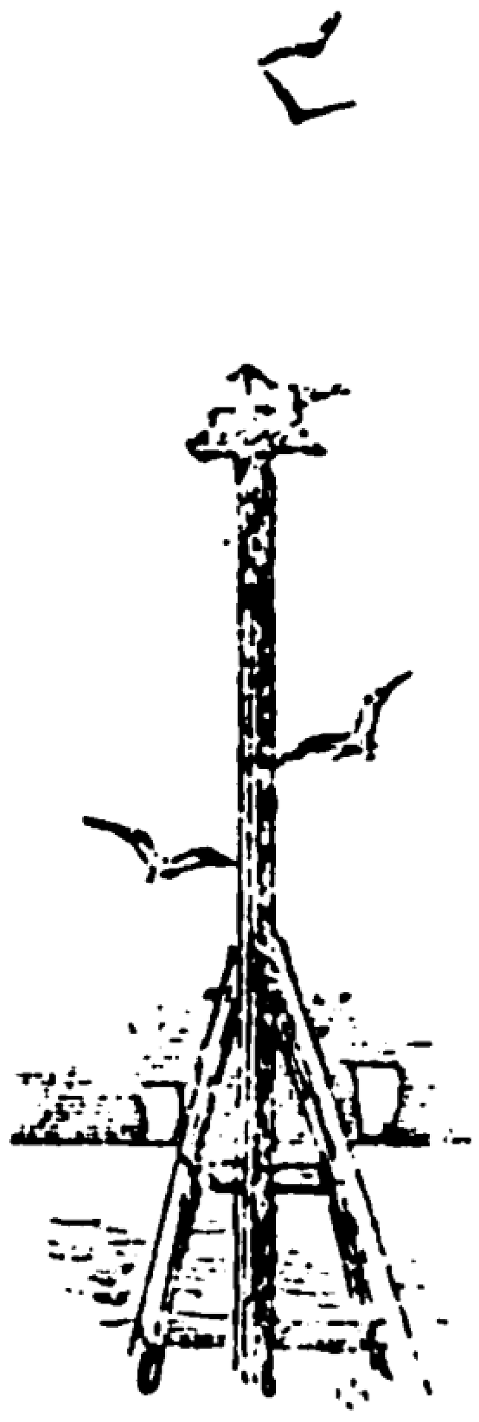
やどらまく思へどせんなく、元來し路の松のかげふみつゝ、岡にのぼり岡を下れば、麥ばたづたひふきくる風に、醉ひたるこゝちすが〲しく、停車場に來る。

眞砂路の松の影ふみてわがくれば　千亦
名もしらぬ虫の草むらになく　碩
垣結はずかどもまふけずひと村は　信綱
ゐながらおなじ家びとにして　貞三

汽車にのりては、例の連歌にいそがはし。本所につき、人みな其家路さして、わかれ〳〵にわかれさりぬ。さてもこの折はじめて、まことにわかるべきなりけりと、そゞろに名殘をしくこそなりにしか。

いかにせんやまを拔くべき力にも　碩
　ひきとめ難ききみがわかれを　千亦
松かげのきよき濱邊を見むをりは　信綱
　先おもひ出む樂しかりし今日　千亦
君がゆくまのゝうらは鯨はゆる
　荒きわりそゝこゝろしてゆけ　千亦
此日記の虫ばむときもむしばまで　信綱
　まごゝろのみは猶のこるらむ　貞三

（完）





雜報

●神宮御正殿遷御　伊勢大廟御正殿は一昨年五月廿三日災上したるより、其の後假遷宮ありて、臨時御造營中なりし事は、先に報じたる如くなるが、御工事も、追々進み、去ぬる十日ごろに、悉皆作り終へて、京都御在住、神宮祭主賀陽宮邦憲王には、同廿四日御參宮遊ばされ、三日間、齋戒御參籠ありて、十月二日に遷御の御式を行はせらるゝ由に承れり。又、遷御參列は、是迄祭服とて、位階の高下に依らず、何れも、同色たりしを、今度は、悉く位階に依つて、新調せしめらる由にて、此の調製方は、御裝束御用達京都烏丸下

立賣上る高田茂へ申付られ、其の裁縫は京都烏丸松原下る西村吉兵衛承はれりとぞ。

十月二日遷御に參列の神職は、神宮奉仕の以外よりも、臨時雇として、御用ひあるもの少からざるやにて、名譽のことなれば、臨時雇の内に加へられんことを彼是紹介を以て、某神社宮司禰宜等の續々申込み居る者、殆ど二百名以上に達し、既に滿員となり居れるが、今神宮司廳の之に對する採用方針は、先づ維新前まで、神宮に奉仕したる者を採用し、其の補缺には、官國幣社宮司を以てする見込にて、舊神官と雖も、現に商業を營める者等は、採用せざる趣なりといふ。又御白石持に就ては、神宮司廳部内に、二派の議論起り、内務省の指揮を仰ぐに至りしこともありしが、其の後聞く處に依れば、端垣御門外までは、運搬を許し、新殿へは縄張を爲し、一切人民の出入を禁ずることゝせりと。尚は遷御參列には、宮司は、正三位伯爵冷泉爲紀氏は、無論黒色を着せらるべきも、權宮司桑原氏は、從六位なるにも係らず、今回は、兩宮司と云ふ上よりして、黒色を着するとゝなりし由。

尚は、遷御、御道筋は、新調の布を敷き、板垣南門より、以内、八重堅木鳥居を經て、端垣南門まで、白絹、瑞垣より白羽二重、御正殿階上は、錦を敷く由、今此に遷御の事を承るに、御鎭座以來六百年間の御事は詳かならずと雖ども、御歴代毎に御修築あらせられ、天武天皇以來は、御式年制定められ、二十年を以て、一期とし、持統天皇の四年九月十六日、今の東の御舗地に新に正殿御改築に相成り、遷御大禮を行はせられ、明治二十二年御式年遷御まで、都合五十六回、此の間臨時遷御は、今回を合して五回なりと。因に記す。去

し廿八日午前八時執行の杵築祭には、賀陽宮殿下御出仕あらせられき、此の御祭は、御祭中、最も鄭重の御式にて、其の祭主宮殿下を始め奉り、冷泉宮司桑原權宮司正權禰宜主典宮掌、及び造神宮使司副使等立合て、宮司より、權禰宜までは、白杖と云ふを持ち、新御正殿御床下に於て、歌を歌ひつゝ、心御柱の根を築き固むるものにて、主典宮掌は、同じく、高欄の御柱根を築くことなりと。其杵築に歌ひ奉る歌は、左の如し。

かしこしや五十鈴の宮の杵築してけり。國ぞさかゆる鄰ぞさかゆる。萬代までに。よろづよまでに。

●勅使　伊勢大神宮遷御式の事は前項に詳記せしかごとく、其の勅使として、過日左の通り仰付られたり。

掌典長　岩倉　具綱

皇大神宮臨時遷御に付奉遷勅使として參向被仰付

掌典　宮地　嚴夫

神宮神嘗祭勅使參向被仰付

皇太神宮臨時遷御に付出張を命す

●臺灣神社官幣大社と爲る　臺灣神社創立に付同神社々官幣大社に列せらるゝ旨仰出されたる趣、内務省告示を發せらる。

●秋季皇靈祭御祭典の次第　去し廿三日秋季皇靈祭に付、宮中皇靈殿に於て、御式を行はせられたり。今、玆に當日の御次第を記し奉らんに、午前八時といふに、式部職官員奉仕御殿の御装飾を爲し、各員着床、奏樂中に、御開扉神饌を供し、祝詞の奏讀あり、終りて、一旦御閉扉一同退出同九時三十分より、皇靈殿神殿御開扉、神饌、及び、御幣物を供し、同十時　天皇陛下御代拜岩倉掌典長、皇后陛下御代拜津守權掌侍着床、是より、先、

皇太子殿下には陸軍少佐の御正裝にて、東御車寄より宮中に御參內、同妃殿下御代拜吉見御用掛、並に、閑院宮載仁親王、小松依仁親王、山階宮菊麿王、久邇宮邦彥王、梨本宮守正王の五皇族殿下と共に順次御着床あり、親任官以下文武百官參列、御代拜岩倉掌典長、第一に御拜を爲し、御告文を奉奏し、御玉串を捧ぐ、次に皇后陛下御代拜津守權掌侍御玉串を奉り、御拜終りて退出、次に皇太子殿下同妃御代拜吉見女官、各皇族殿下以下同樣御拜ありて、其の式を終らせられたり。當日參拜の文武官は、以上各皇族殿下を始め奉り、田中宮相、榎本子、伊東海軍大將、東久世樞密院副議長、川村、細川、中牟田、杉、淸岡、林の各樞密顧問官、松岡行政裁判所長官、德川家達公、島津忠濟公、三條公美公、淺野長勳侯、鍋島直大侯、花房帝室會計審査局長、野崎安岡兩海軍中將、三宮式部長官、三浦宮中顧問官、相浦海軍中將、船越宮中顧問官、長谷川近衞師團長、石黑軍醫總監、淺田外務總務長官、中山東宮大夫、川口宮內次官、千家東京府知事等八十餘名なりきと承りき。

御慰問

八月二十日東京出發淸國に渡航し、行旅三十五日にて、廿三日歸朝せる岡澤侍從武官長一行の軍隊御慰問幷に、其の行程に關する情況を聞くに左の如し。

一行は、八月二十日東京を出發し、二十二日御用船小倉丸に搭し、宇品出發、同月廿七日、太沽沖十哩許の處に投錨したるが、同所に於ける列國艦船の電燈燦爛として、人目を驚かす者あり、同夜は風波ありし爲め、上陸を見合せ、越えて二十九日、同沖碇泊の常備艦隊司令官旗艦吉野に至りて、

出羽司令官、及、各艦々長以下諸將校を集め、嚴かに艦隊御慰問の優渥なる聖旨を傳へ、勅語書、幷に、御下賜品の授與を了せり。夫より、同日上陸太沽に一泊して、三十日天津に達し、領事館に投ず。同館は戰爭中彈丸等に觸れ多少の損害はありたるも、差したる異狀なし。同地滯在、三日中、兵站部、其の他一大隊の守備兵、及び、後送患者等を巡視せり。去月三日、兵站部の便船にて天津を發し、途上處々の兵站線守備隊（約一小隊宛配置）を慰問し、六日、通州に上陸、同地にある步兵一大隊、及び、砲兵縱列の慰問を爲し、五里餘の陸行を續けて、七日午後七時過漸くにして北京に入れり。北京にては、直ちに、我が公使館に入りしが、公使、及び、公使館員は云ふ迄もなく、同所にあり、山口中將の率ゆる第五師團司令部も、亦、同館内に設置せられたりしかば、直ちに公使館員、幷に、第五師團御慰問の叡旨を傳へ、勅語書、並に、御下賜品を授與せらる。公使、及び、公使館員に對しては、特に有り難き御諚あり。天皇陛下よりは、卷煙草、皇后陛下よりは、葡萄酒若干を御贈賜相成れり。包圍當時、我が、公使館は、我軍と英兵の防禦線を隔て丶、英國公使館に隣り居るより、陸上連絡の不通と爲りし後、兩館の間に隧道を造り、往來を自由ならしめたれば、西公使等は、時々英國公使館に至りたるも、概ね我が公使館内にありし由。處々砲丸の命中せる迹あるも、格別の破損はなかりき、八日九日には、公使館、及び、其附近城門の現況を巡視し、十日は、内にありて調査の事務を執り、十一日には、特に宮城を巡覽したるが、各城内とも、各國守備兵、之を警衛し、宮中には、先帝の妃、其の他の官員何れも在せりと云へり。北京滯在中、途上、

米國司令官に邂逅せるも、其の他には外國將官との來往等は、絶えてなかりき。一行が到着の前日、慶親王は避難地より歸京せられ、山口第五師團長は、即日訪問し會見せられたりとの事なり。當時、同地駐在の各國公使は、未だ引揚たる者なく、只、露國公使、ギルース氏のみは、一行の北京出發後、間もなく天津に下るべき模樣ありき。而して、露國撤兵の事は、既に公然たる話ありしも、其の後本國政府の命令に依り、見合せたりとも云ふ。我兵は、半數位撤兵すべしとの噂ありしも、素より確たる事には非らず。又、所在軍隊には、多少の病者發生せるも、敢て著るしき多數に至らず。氣候も朝夕は、稍々、秋冷を感じ、日中を除いては、寧ろ東京より凌好き位なりき。一行は、十二日を以て、出發通州に下り、十三日夜は、船中にて過ごし、十四日天津領事館に一泊、十五日太沽に出で、十六日、再び、同地出帆の小倉丸にて歸朝の途に就き、二十一日未明宇品に入港越えて、二十三日無事東京に歸着せる次第なりと。

●露國皇室へ御贈勳　我皇室より、昨日露國皇太子ミチール、アレキサンドロウイム親王及、露國皇帝叔父セルジ親王へ、大勳位菊花大綬章を贈進あらせられたり。

●伏見若宮殿下の御篤志　府下北多摩郡立川村普濟寺は、鎌倉建長寺派の中、本山にして屈指の巨刹なるが、伏見若宮には、其の眺望佳絶なるを愛でさせられ、年々同寺に成らせられ、三伏炎暑を避けさせ給ふを例とせられけるに、同地方は、赤痢病多きを以て、同村長始め、村民一同は、萬一悪疫の流行等ありては、殿下に對し、甚だ恐多き次第なりとて、衛生談話會、又は、幻燈會等を開き、豫防注意の結果、同村に限り、是迄一人も、

赤痢患者を發生せずと。此の事當時同寺へ御避暑中の殿下の御聞に達し殿下よりは、殊勝の事に思召同村衛生組合へ、金圓御下賜ありたるにぞ、村民一同は、殿下の御芳志に感じ、益衛生の發達に盡力し居れりと云ふ。

●伏見宮家御慶事　伏見宮貞愛親王第二王女禎子殿下には、過般侯爵山内豐景氏と御結婚の御内約整はせられしが、御入輿は、愈々來る十一月初旬と御内定相成りたる由。

●故有栖川大將宮御銅像　殿下御銅像模型は、彫刻家大熊氏廣氏擔任にて、目下小石川砲兵工廠内工場に於て、作業中にて、既に、八九部通り竣功せられたる由。右は、陸軍參謀本部の監督なるを以て、寺田參謀次長は、去廿二日檢覽したるよし。

▲孝女　信州北佐久郡岩村田町秋山豐治の末女ヤス(十三)父母共に、病床にありて、一家の生計甚だ、窮極せるより、疾く學校を罷めて、絲切團子を行商し、辛うじて老親を奉養せしこと數月、毎日午前三時には、必ず、起きて自ら團子を製し、之を賣り歩きて、悉くる時は、家に歸りて、又之を製し、終日終夜身を休むる餘暇なし。近傍漸やく孝行娘の評判あり。四隣の人々申合はせ、朝夕二回づゝ團子を搗きやることゝせり。

●孝女賞賜　芝區芝口三丁目一番地平民文助三女草鞋小賣業名取ハル女(二十)は、十四歳にして、母を喪ひ、父は、中風症を患へて、病床に在り、僅かに草鞋を鬻ひで、看護孝養すると十年一日の如く、夙に孝行の評判ありしが、過日東京府知事より、左の賞狀を賜ひたり。

東京市芝區芝口三丁目文助三女
名　取　ハ　ル

資性温良、克く父母に事へ、適々、父瘋症を病み、進退坐臥の

自由を失ひ、次て、母も、亦疾に罹り、幾くもあらずして遂に歿し、生計益々困窮に陥るも、忍耐家政を理し、日夜看護の傍ら、草鞋を製き、僅かに、其の所得を用ゐて、藥餌を勸め、甘旨を供し、一意承歡九年の久しき、倦怠の色なし、隣保擧な至行を稱す。孝道の篤き、洵に奇特とす。依て爲其の賞金一圓五十錢下賜す。

●貞婦藤田ちよ女

ちよ女は、岩手縣陸中國紫波郡、赤澤村平民藤田常治氏の妻にて、慶應元年うまれぬ。夫常治氏は、家計豊ならず。小作を爲して、僅に、其の日を送る有様にて、且父の申藏は、すでに六十五歳にして、盲目なれば、起居も自由ならず、母のくま女も、五十九歳にて、身にやまひありて、働く事もならぬに、氏は、夫婦の間には、四人の子供もありて、一家八人を養ふこと容易なるわざにあらず。かゝる困苦の中に、ちよ女は、夫を助け、夜の目も寢ずに稼ぎてより、十八年の今日まで、毫許の變りもなく、夫に對して、能く事ふるはさらなり、盲目なる舅始め、病身なる姑に、他目にも羨しき迄の孝養を盡しぬ。されど夫妻が、如何にたち働くも、困難は、益々重ね來るに、常治氏は思ひさだめて、布哇に出稼ぎせんと決心し、其の由をちよ女に語り、涙ながらに、別を告げ、跡の事ども、能く頼み置きて、昨年六月二十四日、海外遠く、出立したり。ちよ女は夫より、一層の難儀を加へたるも、些も厭ふ氣色なく、益勤めて、夫の歸りを樂みて、ます〳〵孝養をつくし、よく子どもを育てつゝ、立働くにぞ、近隣の人々は、誰賞せねものもなく、昨三十二年九月、同縣知事より左の賞與を下賜せられぬ。

岩手縣陸中國紫波郡赤澤村平民
藤田常治妻
藤田ちよ

平生舅姑に事へ、孝養怠らず夫に對しては、節操を盡し、家政

に仙勉し、志行を誣せざる十八年一日の如し、洵に婦女の龜鑑たるものとす。依て爲其賞金弐圓下賜候事。

明治三十二年九月二十八日

岩手縣知事正五位勳四等末弘直方

●兒島家の慈善寄附

北京籠城中名譽の戰死を遂げたる、故北京公使館支那外交官補兒島可一郎氏の爲め、香資を贈りたる人々へ、應酬の禮を略し、同家より、日本赤十字社、其の他の基本金の中へ左の如く寄附したりと云ふ。

金百五十圓也	日本赤十字社
金百五十圓也	高等商業學校
金百圓也	東京市養育院
金百圓也	大井村小學校

●女學校

●全國高等女學校長會議第一回文部省修文舘樓上に於て、過日柴大阪第一高等女學校長を始め、府縣市郡町村立の同校長三十四名參集し、全國高等女學校長協議を開き、議事に先だちて、會長の選定、及、會場整理に關する件、同會期日數に關する件等に關し協議を爲し、結局會長には、東京府第一高等女學校伊藤貞勝、及、同第二の林吾一の兩氏會長とすること、議事は、毎日午前九時より、午後四時迄議すること、會期數は、凡一週間として各種學校をも次參觀すること等に決し、昨日は議事に入らずして正午一同順散會せり、尙澤柳局長は、當日一場の演説を爲せりと云ふ。▲第二回目には高等女學校用修身教科書を編纂の儀、及び、同學教科細目を調製せんとを文部省に建議の件。高等女學校に於て、小學校教員を養生するの可否、第六今日に於て執るべき、國語教授の方針如何等、其の他數項に關し、審議せりとぞ。▲日本女子大學の進行多年成瀬氏の企畫せる日本女子大學は、贊成者續々相踵ぎ且つ資本金の如きも、既に十三萬餘圓集りたるを以て、愈々小石川高田豐川町に校舍を建築する事としたり、其の費額は、六萬圓にて、一切の工事を清水滿之助、赤神善三郎の兩氏引受け、來年三月を以て、工事落成四月より、開校の豫定なる由、學校の設備は、大學部と、附屬高等女學校を置き、修業年限は、大學部を三年高等女學校を五年とし、其の高等女學校に入るべき生徒の學力は、高等小學第二年級を卒れる者は、無試驗にて入學を許す事とし、又明年度開始する大學部の學課は、先づ家政部、英文學部、國文學部とし、募集生徒は、兩校を合し、五百人の豫定なる由。▲愛媛縣今治町に縣立今治高等女學校を宇和島町に縣立宇和島高等女學校を設置して、明治三十四年四月より開校の件認可ぜられたり▲愛媛縣北宇和島郡各小學校裁逐科教員は過日會議を

開きて、次の諸問題を評議したりき。一運針法を教ふる間に、花形等を交へ教ふるの可否、二教授上實物を用ふると、雛形を用ふるとの得失、三尋常小學の裁縫教授を通常の教室にてなすの可否もし可なりとせば、掛針はいづれに設くべきか、四尋常科にて、簡易なる積り方裁ち方なども授くるの可否、五多數の生徒に襟肩廻しを教ふる場合の良法、六教授細目を一定するの可否▲音樂家白井規矩郎氏は、これまで、春秋二季府下の小學校教員に遊戲唱歌の講習を行ひ來りし由なるが、いにし廿四日より成女學校にて、同氏を聘し、唱歌遊戲の女子講習會を開き自今同氏一箇のものをも、此方へ合併する由、尙右成女學校講習會は、本日より開會し、毎日午後二時より、講習期は二時間づゝ教授し、會費は一圓五十錢なりと、三週間にて終る筈●▲現今女子師範學校の設置せられたるは、東京大阪新潟の二府一縣にして、師範學校女子部の設すらなきもの、全國に十數縣あり、女子教育の振張を圖るべき際、此のまゝに捨置くべきにあらねば、文部省にては、今回師範學校の學科、及び、學校令の改正を機とし、成るべく、各學校をして、女子部を設置せしめ、進んでは、獨立の女子師範學校設立を獎勵する筈なりと▲東京府女子師範學校は、すでに、生徒の募集も終へたれば、來月七日より、授業を開始する由▲女子師範と併置せられたる東京府第二高等女學校は、去し廿四日より授業を始めたり、生徒數は三百人▲大阪府第一高等學校を東區清水谷東之町に設置し、三十四年四月より開校の件認可せらる▲大阪市保育會は保姆養成科を設置する必要ありとて、建議書を知事に出だせり、其參考案に曰く。

一、大阪女子師範學校内に保姆養成科を設くる事
二、養成科に入るべきものゝ資格は高等小學校（四年）卒業以上の學力を有する女子たる事
三、其人員は凡そ二十名とする事
四、養成期間を一ヶ年とする事
五、養成中は毎月手當として各三圓を給與せられたき事
六、養成の上は一ヶ年間は必ず指定の幼稚園に從事するの義務を負はしむる事（後略）

▲神奈川縣高等女學校は、いよ〱横濱市扇町五丁目、百五十番地なる、官有地目下水道附屬倉庫の敷地に建築することゝ決せり▲臺灣銀行役員三木氏の北堂マサ子は、大阪梅花女學校保育科出身にて、幼稚園には經驗あり、且、熱心なるが、今回同地に幼稚園を設立せんとて、普く贊成を求めたるに、いづれも熱心に贊同して、創立費の寄附等もありたれば、近々淡水館の一室を借受けて、開園する筈なりと。▲熊本市私立尙絅女學校は、新式の裁縫科教授を以て、夙に名ある校なるが、本年裁縫科の夏季講習會を開きしに、全國各府縣よりの入會申込、頗る多く、講習生、二百六十七名に及び、尙校舍狹隘のため、謝絕したるもの百餘名に及びたりと、講習生縣別表中福岡縣の八十七名、長崎縣の四十名三重縣の二十四名を見ても、同校名聲の廣く聞えたるを知るべし

▲女子高等師範學校撲備科神田三崎町の國語傳習所にては來十月一日より同科を設け授業するよしにて同所にては此迄國語、地理、歷史の豫習科へ入學したるもの多數に付更に同科を設けたりと

婦人會

▲大日本婦人教育會常集會同會は、去にし廿九日、午後一時半より、麴町區永田町、高等女學校、附屬。幼稚園に於て、開會、左の諸氏の講話ある由、

一北京籠城談　文學士　服部宇之吉

一米國婦人の狀態　女子高等師範教授　安井哲子

▲四恩瓜生會は去にし二十日、例會を小石川大塚辻町の養育院會堂に開き、同院死亡者の追吊供養を行ひ、終りて、釋雲照律師伊藤秀快師の講話ありきと、▲長崎縣北松浦郡福島村婦人會は、去九日、同村登原小學校にて、大會を開きぬ、出席者、二百七名にして、まづ會長村田ゆき子氏の挨拶あり。次に久住呂小學校長の救急法、熊澤村長の婦人の心得などあり、閉會には、稀なる盛會なりきと▲有栖川宮妃殿下を總裁に仰げる婦人共立育兒會は、着々その慈善主義を實行せる由なるが、この度資金十萬圓を醵集して、病院を建設せんとの計畫ある由。▲婦人矯風會附屬の慈愛館は、廢業娼妓、及び、是より醜業に身を沈めんとする少女等を救育し來りしが、都度娼妓の廢業は、本人の自由となりければ、此の際充分の擴張をなし、いよ〳〵目的を、完成せんとて、去八日委員會を開き、種々協議を凝したりと、尙慈愛館主任者ラージ氏夫人は、歸任のため、後任者の撰擇中なりと▲二十七八年戰役の砌には、府下看護婦會より、請うて、赤十字社救護事業に服務したるもの少からざりしが、此の程も博愛看護婦會、其の他二三の團体より、同樣申請したれど、同社にては、設備大に整ひたれば、未だ是等の補助を受くる必要なしとて聞届けざる由、▲新潟縣長岡婦人慈善會は、去六日總會を開き、會務擴張の協議をなしたり▲仙臺片平丁神宮奉齋會宮城本部内に設けられたる婦人講話會は、去にし十日例會を開きぬ。▲割烹協會さきに、一寸消息せしごとく、割烹協會は、いよ〳〵設立されたり。其の目的は、「専ら我國飲食調理の事を考究し、之が、改良を講し、以て、世に普及せしめんとする」にあり。其の手段としては、講義錄を發行し、倶樂部に於ては、時々講話會を催し、活庖部に於ては、料理の實修品評となすとぞ。會員は、終身會員（十圓以上一時出金）特別會員（毎月二十錢以上）通常會員（毎月十錢づゝ）の三種とし、何人にも入會を許す由。▲清韓婦女教育下田歌子女史は世界に於て、最劣等の地位にある支那朝鮮の女子を啓發誘導するは、隣邦たる日本國婦人の義務なりとし、之が方法につき講究中なりと。

故杉山書記生の葬儀

北京に於て、義和團匪の爲に、虐殺せられたる、故公使館書記生杉山彬

の遺骨、先程東京に到着したるにより、去にし廿二日午後一時麻布笄町の自宅より出棺し、青山墓地に於て、神葬式の執行ありたり。會葬者は、淺田外務總務長官、畑秘書官、加藤書記官、寺尾參事官、杉村通商局長、西男爵夫人、楢原未亡人等百餘名なりき。

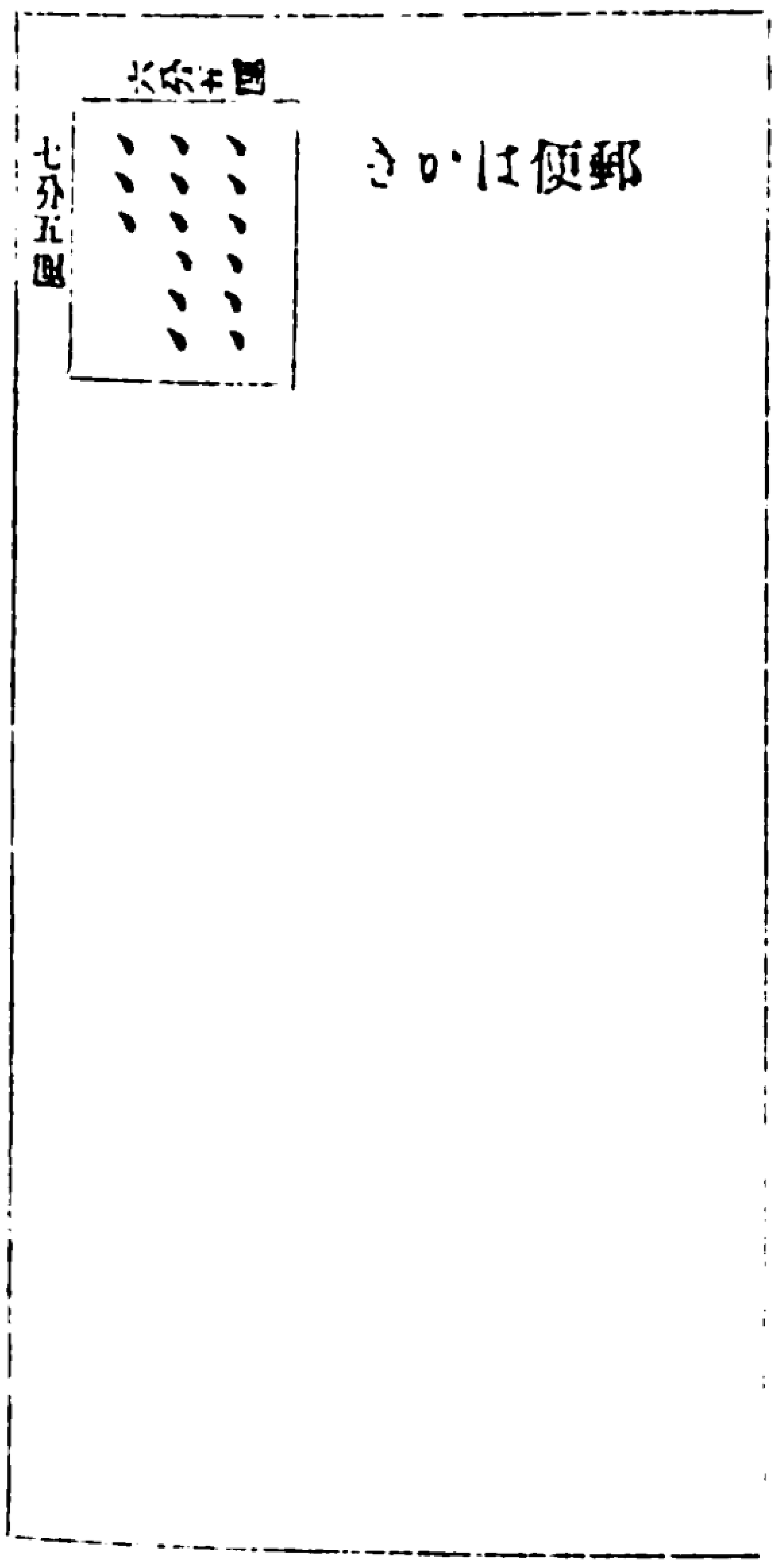
●小女の富士登山　女は、身に穢あれば、富士山に上ること能はず、もし登山を企つるものあらば、立所に神罰を蒙るべしとは、古來のいひ傳へなるが、先づ年野中至氏の夫人が、良人の大業を助けんとて、而も、冬の雪の中に登山せしより、傳説の虚妄なることを、土地の女等も知るに至り。この程、御殿場驛の田代八郎平の長女あさ(二十年二ケ月)土屋伊三郎長女きよ(十九年十ケ月)の兩人は、首尾よく登山して、歸宅せりと。

●女子雇員募集　郵便替爲貯金管理局にては、女子雇員を募集し、去し廿三日試驗を行ひし由。

●大日本史料編纂　史料編纂の事業は、明治初年三條太政大臣が、修史總裁たる勅命を奉せし以來、現今の東京帝國大學文科大學史料編纂掛に至るまで、前後二十餘年の歳月を歴て、今年四月、漸く、其功を竣へしものなり。而して、明治十八年内閣に修史局を設置さるゝ以前にありては、其の成績見るべきものなかりしも、文科大學の手に歸して、後着々進歩し、殊に三上文學博士の、専ら、此の任に當ることゝなりし以來、材料、漸く、增加し、今や古文書古記錄古圖畫等、苟も、歴史の資料となるべきもの、募集網羅して、殆んど遺漏なきに至れり。依て文科大學に於ては、今年より以上蒐集に係る文書を修訂し、大日本史料、及び、古文書の名を以て、漸次公行することゝなり、則ち、明年八月迄を期して、先史料四冊、古

文書、二冊を印刷する筈なり。元來史料蒐集の事たる、頗る、至難の事業にして、一朝一夕の能する所に非ざるのみならず、之れが編輯の上にも、亦少からざる手數を要することとなるを以て、之を十五ヶ年の繼續事業となし、今年より創めて、明治四十七年に完成するものなり。出版の順序は、時代を分ち、修正の成るに從ひ、印行に附するものにして、則ち今年は、史料第六編の第一第二の二卷（建武中興即ち後醍醐天皇の元弘三年より始む）同第十二編の第一第二の二卷（徳川幕府開始の時、即ち後陽成天皇の慶長八年より始む）古文書第一第二の二卷、共に、奈良時代の六冊なり、今、此古文書に收むべき圖書のみにても、其數十餘萬あり。一冊六百頁とするも、全部六百冊の多きに上るべしといへど、其の史料の如きに至りては實に數千の大冊を見るに至るべし。猶、右は、吉川半七、大日本圖書株式會社、富山房の三書肆をして、共同して、豫約方法を以て、發賣せしむる都合にて、全體は浩瀚なるものなれども、其部分、一時代のみにても豫約し得べく、編纂の體裁も、之に都合よくし、豫約者の多くして印刷部數多きに、上るときは、肖像圖畫文書等の寫眞板の挿入を豐富にすべしとなり。

●私製郵便葉書雛形　規則改正に依り本月一日より、私製郵便葉書の發行を許可する事となりたるが、其の雛形表面は、左の如くにて、左上部の



小角形（横六分五厘縦七分五厘）の中には、「郵便切手は、此の所に貼付すべし」と記入する事と規定し、通常葉書と同一の注意文を左右に印刷し、若くは輪廓を設くる等は、妨げなしとし、其の他の畫圖、及、文字は、印刷せざるものとす。又用紙の寸法は、縦四寸五分七厘、以上四寸六分二厘以内、横二寸九分二厘以上二寸九分七厘以内に限り紙質は、通常葉書と同質以上の者を以て、制規の品と看做す由なり。

●日本人の躰軀と食鹽　「こは憲政黨々報」に戴する所にて其の說の要、まづ菜食に依る我邦人は、多量の食鹽を攝取するの必要あるも、過量の爲に其の躰量を多く分解消耗せしむるを言ひ、本邦人の潔癖に關して、左の如き言を爲せり。

本邦人は世界中最も清潔なる人種なりと稱せらる。特に入浴度數の多きが如き、他に例なき事なりとす。然れども此れ自然の必要に迫られて、此風習を成しつゝあるに非るか。何となれば、休中分解消耗作用の急速なるに從ひ、發汗作用の激烈なるが爲め、特に鹽氣排泄の甚だしきより、大に外皮の濕潤を覺え、從て屢は入浴するの已むを得ざる所以ならん。

而して、本邦人の早老なる所以に就ては、左の說あり。

本邦人の生熟期甚だ速にして、十數歳にして既に結婚し、六十歳に至れば、既に隱居生活を成すが如き、彼れ外人と大に趣きを異にす。此れ亦体質の新陳代謝の度急激なるが爲め、白皙人種が七年にして全身の代謝行はるとせば、我邦人は其半にして行はるゝが如き、恰も熱帶人と同趣なるが爲めに非るなきや。

斯の如く、全身の代謝の急速なるは、亦、一に食鹽の過食に因由すとせば、食鹽過食の害や、實に恐るべきものあるなり。

次に我が國に病者多く、特に胃病の如き頻年其數を増し、今や日本病の名稱を附せらるゝが如き、是れ亦我食鹽所含の總菜物の多きに起因するが如し。

史に據りて、之を見るに、本邦人躰軀の矮小虛弱に傾き、並に胃弱症を併起したりしは、正しく鹽

業及び味噌醤油業の發達と並行したる跡歴々たるものありといふ。左の言は其參考とするに足るものならん。

我國の製鹽業が稍振起を來せしは慶長年間にして、爾後幾多の盛衰を經て今日に至りて愈よ盛んに、又醤油業は同じく慶長寛永の頃より稍世に著しく、彼の有名なる下總野田の如き、寶暦年間を始めとし、維新以後駸々として産額を增し、味噌も亦同じく此等と倶に世に彰れつゝあり。之を要するに、我國製鹽及味噌醤油業は、皆二三百年前より漸く世に知られ、爾來滔々たる勢力を以て國民の嗜好する所となれり。これ明かに我國民體格の矮小虚弱に傾きたると深く相關聯するを知るに足るなり。

食鹽の、國民の躰軀に及ぼすの害、果して以上の言の如しとせば、本邦人たるものは正に這般の生理に意を用ひざる可らざる也。

秋

かものまぶち

はなすゝきますほのいさにひきくらへ
　見ればあきはぎいづれともなし

あかしがた夜舟こぎいでゝこゝろさへ
　つなくかたなくみつる月かな

故里なわききりころもはるかけて
　まてさやかりのたのめきぬらむ

教の庭



十月五日兼題　羇中露

天　松山市鐵砲町　野中あさ子

よそに見し草葉のつゆをたひころも
　そでにかけてもゆくやまちかな

地　但馬國出石町　西川順子

朝な夕なそひゆくものはくさむらの
　つゆとたひねの日かずなりけり

人　福岡縣三井郡草野町　武田龜子

たひころもすその丶原をわけくれば
　つゆにぬれそふわかたもとかな

秀逸三首

滋賀　中川芳尾

みやこぢの別のそでもはしあへぬに
　うきしまばらはつゆふかくして

肥後　友永章子

ふるさとをおもひ出たるこ丶ろより
　たび路はつゆのしげくみゆらん

橫濱　關勝子

はる〴〵と思ひこしぢのくさまくら
　さすかによるはつゆけかりけり

(以下原稿到着順)

たびまくら草のむしろにぬる夜半は
　そてもたもさもつゆけかりけり　福原菫子

道さはんひさかけもなきあしひきの
　やまちのつゆにそでぬらすかな　永井さい子

さらぬだにくさのまくらは露けきに
　つきさへそでにやどりぬるかな　山田稻子

わけてゆく野みち山みちこそなれさ
　かはらぬものは露にぞありける　田代雛子

たひころもやつろ丶袖に日ごと〳〵
　夜はこそまされ野つゆやまつゆ　田代綾子

こさらにさひしき秋のたび路にて
　たもとにか丶ろつゆのしらたま　靑木たま子

白つゆにしめりがちなるたびごろも
　ほすひまもなきあきのあめかな　森このゑ子

旅にしてふるさとしのぶ袖のうへに
　松尾宮美子

むすびあまれるあきのしらつゆ

たびごろもならはぬ野邊の夕ぐれに　松尾せい子
なほそひまさるあきのつゆかな

さらでだにぬるゝ旅らのころもでを　中村登久子
なほひたせさやつゆのおくらむ

秋の野に置くしらつゆのわがそでに　大谷津峯子
きゆるもはかなき旅のそらかな

深くさののはらのつゆによころへて　北島松子
いさゝぬれますたびころもかな

けふいく日露なしきれのくさまくら　北島功子
なれゆくつきとあひやさりして

いろ〳〵のはなに匂へるつゆのたま　北島操子
みやこのつとになすよしもかな

はや立のさゝや野にふむしらつゆの　荒井美和子
けしきながむるめきぞたのしき

野に山に木くさにはなにおくつゆは　荒井喜久子
悲かるたびちのしをりなりけり

ふるさとはおもふも遠しいまいく日　篠田圓子
たび路のつゆにぬるゝなるらむ

くさにおく露のみよそに見やはさむ　遠藤旬子
われも浮き世にかり寝しぬれば

日かずへぬちかきたびさは思へども　松尾くに子
そではぬれけりあきのゆふつゆ

けさもまたおくしら露にぬらしけり　椎野秀子
ゆくすゑとほきたびのころもで

旅衣ひもゆふくれてゆくすゑは　椎野瀟子
やまちのつゆにそてぬらすらん

くさまくらならはぬ野邊にかりねして　椎野清子
つゆやはぬらすあきのゆふくれ

けふもまたびなくらしけり旅ころも　椎野鋭子
ゆふつゆむすぶいなのさゝはら

たびこそもあさたつ袖につゆちりて　鏡山増代子
ふくかぜさむきのちのしのそら

なには江のあし火たくやに旅ねして　縣靜子
むすびしつゆもゆめにさりける

たびねしておもふかたより村さめの　竹尾みゐ子
つゆさへかけてあきはきにけり

わかさとを出しむかしもかゝりけむ　鍋田龍子
あさたつたびのみちのつゆけさ

さなきだにわびしきものを草まくら　竹村竹里子
あきのゆふべはつゆけかりけり

ひかずふる田舍のあきのたびまくら　服部薦子
ゆめにもむすぶそでのつゆけさ

夢さむるあしたの滊車のさゝろきに　服部正子
かなちのそさのつゆやちるらん

たびなれて今はうしさもおもはぬを　加藤綠子
そでしぼらする野へのゆふつゆ

ゆくもくし滊車のまゝなる旅まくら　三宅中枝子
ゆめにもつゆはむすばさりけり

朝きさのさゝまろほさにおりざらば　河合縫子
あきのたび路の露をみましや

白つゆのおきふしものをおもふさて　長澤いゑ子
こよひもぬるゝたびのころもて

日かずふる秋のゆふべのかなしきに　高田幽子

なほおきそふるそでのつゆかな

たゞ一人ならはぬののへの旅ころも
おくしらつゆはなみたなりけり　鎌田きよ子

茂りあふちくさのうへにおくつゆの
ひかりすゝしきたひころもかな　宮崎たか子

ふるさとの母にたむけん小はきはな
たまとむすびしつゆのひぬまに　高羽ふみ子

萩の上のつゆはきゆともたびころも
そでにおもはぬつゆぞこぼるゝ　高羽萩江子

草まくら今日もたび路に日はくれぬ
いつこのさとにやとなからまし　御巫富士子

行くゝ野ばらのすゑもつゆおきて
なほさととほししらくものやと　佐藤保子

みわたせば月のひかりにたびのそら
千くさにあまるつゆのしらたま　服部倫子

ゆくみちの露はいとはじさらでだに
しめりがちなるたびのころもで　徳永萬壽子

友もなくいとゞさびしきたびまくら
あはれますほのそでのつゆけさ　徳永廣子

草まくらたびねはつゆのおきふしに
かはくまもなきわがたもとかな　徳永識子

旅ころもくさのまくらになれしより
夜ごとのつゆやふすまなるらん　山代由子

馬くるましげきたび路もことさらに
そでのうへこそつゆけかりけれ　佐々小琴子

あさ夕にむすびなれてもくさまくら
つゆの小とこぞくるしかりける　佐々有郷子

くさまくらたびねのうさや重ぬらん
かはくまもなきつゆのそでかな　澤田春子

夕さればたれをまつともしらつゆの
たびのたもとにおきまさりけり　溝口良子

ひらけゆく御世のたびぢも草まくら
あきの野すゑはつゆしけくして　牧衆子

ゆふべゆふべ結びかへてもおく露の
あまるはくさのまくらなりけり　東郷常子

なにとなくかなしかりけり旅ころも
そでのうへにもつゆしけくして　高石登代子

おきまとふをくさの露のきよけれは
あさゆくたびのこゝちよきかな　岡本蔦乃子

旅つとにひろひてゆかんよしもかな
みちの小くさのつゆのしらたま　岡本松野子

ふるさとをしのぶか岡のつゆちりて
そてもすそもぬれはてにけり　大橋衆子

草まくらさらでもそでのかはかぬを
おくつゆふかきあきの野へかな　佐野鶴子

きもなれぬ旅のころもに露おきて
さびしさまさる野路のゆふくれ　上村ちさ子

さらぬだにさびしきたびの草まくら
つゆおきそひてねられさりけり　上村英子

ふる里はきくのさかりと成りぬらし
こしのやまみちつゆかほるなり　高砂きよ子

さむしろにころもかたしく宿りには
あられとそてそつゆけかりける　高砂菊代子

むしの音にあはれをこめて草まくら　高砂清子

秋なく／＼つゆのおきまさり行く　御味死以子

くれぬれはちくさに露のおきそへて
　ゆく手のみちのいさゝわびしき　米澤つる子

はる／＼とゆく手も遠きみちのへの
　くさ葉にむすぶつゆのしらたま　竹村貞子

ふるさとをこふるなみたやあさち原
　くさ葉のうへのつゆとなりけん　山中ふさ子

あめりかのつゆも大和にかわられと
　かなしきものはくさまくらかな　影浦たさ子

ふる里のそらなつかしきたびころも
　のやまのつゆにぬれぬ日もなし　森こさ子

宿るへきうまやは見えず日はくれて
　おくつゆしけき木そのやまみち　野村さく子

あはれなりならはぬ旅のくさまくら
　おくつゆしけきそてのうへかな　宇高松子

ふるさとをしのふたもとにおく露は
　吹くあきかせもはらはさりけり　山崎千代子

草まくらしころにそてもぬれにけり
　おくつゆしけきたびのかりねは　梯たけ子

たゝひとり山ちたどらんけふもまた
　をさゝのつゆをうちはらひつゝ　河村靜子

みやこいてゝならはぬたびは草まくら
　こけのころもゝつゆけかりけり　藤井りゑ子

いさこゝにゆめむすはなん草まくら
　つゆをこよひのあるしにはして　河野みち子

白つゆはこゝろつくせと染めあへで
　にしきかさらぬたひころもかな　板橋花

しらつゆはおきまさるなりたび人の
　わけゆくそてのいろあするまて　板橋信子

ゆきくれていさゝわびしき旅ころも
　ぬれつゝたどるあきのゆふつゆ　上原信子

虫の音をきくたびごとにたびころも
　つゆにはぬれぬ日はなかりけり　村上操子

まくらには草をむすはぬきみか世も
　露にはぬるゝたびころもかな　田村多豆子

秋ふかき木曽のやま路をこえ行けは
　なみたもつゆもさもにこそちれ

十月五日兼題

秋夜の感

地

但馬國　西川順子

ものゝあはれは秋こそまされと、某の法師のいひけん、秋となれば、何とはなく、あはれに悲しき心地せられて、すゞろに涙さへさしくまるゝは、かよわき女の心からにやあらん。きのふまで、緑の色深かりし、木々の梢は、いつしか、紅葉とかはりつゝ、風のまに／＼、誘はれぬべく、千草にすだく虫の音は、志きりに、つゞれさせよとぞ聞ゆる。げに、虫の音を聞くにつけても、身のおこ

たりの恨まるゝよ。かへり見すれば、年の始めにはかりしわざの、成りしはいとゞ少なくて、空しく過しゝ日のみ多かるぞ、口措しき。あはれ、思へば、朝露のごとしといひけん人世のなかばも、ほどなく過ぎさりぬべきを。いかにして此の年月を消しにけんとおどろかるゝかし。さばれ、いたづらに、過にしあとを悔むもかひなき業なれば、いでや、これより、親しむべき燈火を友となし、いよゝ學びの道の奥深く分け入りて、いつかは、月の桂も手折らなんなど、はかなき思ひにふくる夜半の空高く、一列渡る雁がねもあはれ深し。かすかに聞ゆるきぬたの響は、月にいそしむ人あるを志らせつゝ、いとゞ身の怠りを責むる心地のせらるゝよ。

人　肥後國熊本市東寺原町　田代艶子

わたゝかき櫻かさねを、卯の花のひとへに更へしは、昨日今日と心ゆるしゝが、隙ゆく駒の足かき早く、いつしか、萩の下葉は色づきそめて、ふく風も身に志む秋となりにけり。こよひしも、月かげ、くまなきになき渡る雁がね、何となう物哀れなるに、催されて、端近う立ち出づれば、まがきがもとには、人まつ虫の聲のみならで、鈴虫くつわ虫など、おのがじゝ、時知りがほにすだくも、一しほあはれなり。殊にきり〴〵すてふ虫の、つゞれさせとなくなるは、やう〳〵寒さの近づくを敎へて、怠りがちなる人を、いさむるにやあるらん。さるにても、つく〴〵、己が身を、かへり見るに、此の儚き日月をば、只なす事もなくて、徒らに、早くも一とせの半をすぐ志つること、くもりなき月に對しては心なき虫にも及ばぬかと、いとはづかしや。敎の言の葉にも「竹のねの下はひわたるふしのまも今日の日數をあだに暮すな」と、今更に、打うなずかれてなん。あはれ、今よりはこゝろをこめて、いそしみ勵み、奥ある道をふみ分けばやと、いさゝか、心に感ずるまゝをかくなむ。

人　大阪市　松原かつ子

庭前の蓮池には、蛙の聲たえまなく、かすかにすだく虫の音、いとあはれなり。月はきよくすみて、みるからに、心もさえ〴〵しうなりぬ。何とはなく、書を引出だし、みもてゆくに、いつしか、耽りて、夜のふけゆくも知らでありしが。ふと耳かたむくれば、先のほどのはれわたりし空は、いつしか雨となりけり。昔より、げに、さだまらぬ

人の心にもたくひけむよ。

（以下原稿到着順）

松尾せい子

なべて、老人がねざめをかこつ秋の長夜も、書よむ身には、せかぬ心地こそせらるれ。文机によりて、つむ教草、心の駒に食ませつゝ、只管いそぐ玉鉾の道は、樂しき旅になん。千くさにすだく虫の聲はあはれに、遠里の衣うつ音は、心忙はしうこそ。やから友どち、端近うさそひて、月待つ程の樂しさ。まいて、曇りなき望月の鏡にうち向ひては、心にかゝるうき雲も、拂はれぬべし。昔、菅原の大臣は、つみなくて、筑紫の配所に、この月を見そゞろに君をしのび給ひけりとかや。河原の大臣は、陸奥のちかの鹽がまを、都の内にうつさせて、さやけき月の光を玩び給ひけん。何はあれど、月ばかり、物思のくさはひとなる物はあらじ。君の御爲め、外國に出陣し給ひし軍人らも、なほ、三笠の山に出でし月かもと、詠まれし、古人の思やおはすらん。彼の國に、勇ましき戦死をとげ給ひし人の遺族たちが、しらみ殘れる在明の月に、鹿の聲、あるは、友よぶ猿の聲きゝて、雁ならぬ亡人を、如何にしのび給ふらんと、思は千々に、心は、いよゝさはわたるにも、やうやう、衣手寒くなりて、樹々の露を玉とみだすころからしは、いと心にくうこそ。

中村さく子

實に、ものゝあはれは、秋こそまされ、と云ひけんよ。秋の夜ばかり、あはれにもの淋しきものは、あらじかし。清らかに澄み渡りたるみ空に、さやかなる月影の、ちりばかりの雲もなうてり渡りて、まひるの如く、露しげき千草は、すだく虫の音を聞くにつけても、こし方の事のみしのばれて、おぼえず雨の袂をうるほしぬ。風につれて、遠く近く、聞こゆる砧の音は、いづくの賤が、たがためにうつ衣なるらむ。さては、妻こふる棹鹿の聲など、いとゞ、あはれにきこゆ。一つとして、涙の種ならざるはなし。折から親にやはなれけん、友にやおくれけん、かりがねの一聲、一しほ身にしみ、亡きかぞいろの上など思ひ出されて、ますますさびしく、夜はいよいよふけ行きて、あたりはしづまり、きこゆるものは、たゞ荻の葉渡る夜風のみ。月は、いよいよすみて、虫の音は、ひときは高く、思ひは千々にみだれて、我が身一つに、ものゝあはれを集めし心地せられて、ふしどに入れど、めもあはず、かぞいろにおくれたる我が身のゆく末、いかになげかはしきかも。あはれ閨の戸うつは、散る木の葉ならん。枕にひゞく遠寺のかねは、我が身の不幸をつぐる、無常の音か。あな、あはれ。

香川さよ子

背の根の、長々しく、物悲してふ秋の夜、萩原そよぐ風の、身にしめて、すごきまで、てりかゞやける月に、峯ふみ分け妻こひするさを鹿の音の、かすかに聞ゆるに、哀れも一入まさり、壁に、すがりて鳴きつる、きりぎりすの聲の、木枯に枯はてたるなど、さまざま、心うごきて、文机によりたる身も、文ひもとかん心地だにせず。野邊ならねば、衣手に露のちりそひて、いと物さびし。障子押開き、やれまどより、四方を眺むれば、遠の里に、ともしびの二つ三つ寒く光れる見ゐて、賤の女の打きぬたの音の、川にひゞき、いよいよ高く聞ゆる、哀れ、いはん方なく、いそがぬ身も、寒き事の思ひ出だされて、立ち居も得ず、ふすまかふむりて、涙に袂を結び兼ねき。

遠藤旬子

秋といへば、何となう物さびしうおぼゆるを、まして、

一日二日雨の降りつゞける、身にしみわたるやうなるに、こし方行末の事より、たらちね、はらからの上など、こもごも、思ひいて、心も打しつみいりぬ。折から、叢の程、友どちより、さまさまの虫、おこせられたるを、庭面に放ち設きたりしが、所馴れぬ故にや、始の程は、鳴きもいでざりしに、今は、己が往家とよなれけん、松虫、鈴虫、さては轡虫など、いさみあひつゝ、ふし面白く鳴きいでて、にはかに秋めきたるに、いつしかあめも、あとなく晴れ渡り、夜半の千草における露の白玉と共に、哀れを添ふるなど、げにたのしく、今までの詫しさも、打わすられ、我にもあらずはしゐして、更たけるをも、しらてありつるに、時計のきしろおとに、おどろかされて、うつゝ心おぼゐ見れば、はや、月もかたふきぬれば、やがて、ふしどに入りて、衣ひきかつき、打ふしぬ。

篠田圓子

「我身一ツの秋にはあらねど」と、古の人のうたひ玉ひけむも、ことわりなりや。實に、秋は物思ひなき身にも、何か物悲しきを、まいて、夜に入りてよりは、垣根の虫の音も、一際耳だち、遠く近く聞ゆる砧の音、又、故郷を偲ぶのたねとも、なりてなむ。眠らむとすれど、ねむられぬさま、一人燈火の許に書などひもときて、打見る程に、夜もいたく更け行きて、其の淋しさいはむ方なし。あゝ樂あれば苦あるのたとへに違はず、樂しき春の後には、かゝる淋しき秋の來るは、やむを得ざる事にて、人の身の上も、又、斯くこそと思へば、いとわりなし。折しも、さつと吹き來る嵐につれて、軒端近くに聞ゆる初雁の聲、かなしさもかなし。

長谷塲清子

ひるのつかれに、宵の内より、ねむけさして、たへかたかりければ、ふしどにいりて、しばしまどろみしが、ふと目さめみれば夜やたけぬらし。人々は皆れ靜まりて、いびきの聲かしかまし、犬の遠吠へかすかに、吹きすさむ木枯の風、枕にひゞく夜半の鐘、一として秋のあはれをもよふさゞるはなし。されば、月は、いよゝさへゆき、こゝろもすみ渡りて、すぎにし昔の忍ばるゝぞうたてし。嗚呼、我が父君の、秋風にさそはれて、落る木の葉と諸共に、はかなくなり給ひしは、昨日今日と思ゆるに、過る月日の足早み、すでに、十度の秋をへぬ。父君の世をさらせ給ひしのちは、たのみ少き身の、たゞに母君のかよわきかひなにすがるのみなれば、たゞしきまなびやにも入りかねて、是非なくくもすごしゝが、去年の秋の末つかた、こころだにかたかりせば、何事かなしゐぬことやあると、我と我が心をはげまして、文の林に分け入り初めしが、いまだ、一歩も進みしと、思はれねば、おのれにかなはぬ業なる故か、さなくば、怠りていそしまざりし故なるべし。とまれかくまれ、今よりは、一しほ心をこめて、たゆまずうますまなびなば、牛の歩のよしおそくとも、怠ずば、いかで、千里の遠きも、達せざるべきとて、自らこゝろをやすめんとつとむれども、またこしかたゆくすゑのことなど、そこはかとなく思ひうかばれて、そゞろ涙にむせびしが、かくてはゝてじと、つと立ちてあまどおしひらけば、廿日あまりの月は、空高くかゞやきて、萩の上葉の露にやどり、木々の梢を地にうつしぬ。くさむらにすだくむしの音は、泣くか怨むか知られども、哀れの風情みちくたる、淋しき秋の夜半に、かぜのもたらす雁の一聲、物思ふ身には、いとゞあはれをまさしめぬ。

長澤いゑ子

いつはあれど、秋の夜こそ、物のあはれはこよなけれ。氷よ水

よさ、いたづらに、夏の日の、なす事もなげに過しつるに、いつしか、荻の葉風のおとづるゝにおどろけば、さらぬだに、つゆけき室の、いとゞうらしめりて、ふけゆく、月の光りも、うらさびしく、遠のきぬたも、虫の聲も、皆、おこたる身をいましむる友とこそきこゆれ。人は、只、歌に、文に、あるは詩に、あはれを詠じ、をかしきをながめつらんも、こゝろの友としてめづるは、すくなかるべし。さはれ、己れも、こよひの思ひ出を、おこたらで、秋ぎりのたちもおくれぬ、學の道にいそしみて、やがては、月のかつらも、手折きつ、ふるさと人に、にしきをほこる事を得ば、さてこそたのしきふしも、うれしきふしも、澤ならんなど、こゝろをなくさむる袖に、しらず〳〵おつる涙の白露に、われながらあやしまれて、見上る空に、厂も夜寒をもらしそめぬ。あはれ、鹿のなく音をそへたらましかば、まして、思ひ深からましを。山里なられば、きゝもらしつ。實によもすがら、千々にこゝろは、みだれてなん。

立山ゆき子

あはれ、秋夜ほどかなしきはなし。あはれ、秋夜ほどはかなきはあらじ。古より、物のあはれは秋こそまされと、人毎にいふめるもげにさるものぞかし。まして、わが如きあからさまなる旅寝とはいへ、かく片田舎に住ふる身は、こよなうあはれに覺ゆ。さらぬだに露けき袖はぬるゝものを、昨日までしたしまれし青葉の陰も、あはれ、夕べの雨風に、心あはたゞしう舞ひちりて、只、骨のみぞ殘れる。機をゆする虫の音、いつか鳴きよわりて、あるかなきかの命をもらしたる。夜もやう〳〵、深うなりて、さやけき月には、誰か我身の不幸をかこたざらめや。思へは〳〵、二年の昔とはなりぬ。己れ、まだ學び家に物せし頃、父母君の許し給ふまゝにはやく此校を卒へて、東の都に文の林を分けつくさん、其の折は都にゐます姉君と、上野の花も共に見んものと、樂しみ、夢な忘りそと、自らいましめしも、甲斐なしや。學びの業を卒へんとせし頃しもあれ、種々の相談より、己れ或人の許に嫁ぐ事とはなりぬ。かくも夢に現に思ひしものを、一朝の嵐にちらされし無念さやるかたなく、月に向ひては、雁の涙にむせびしも、此頃の事なりき。あゝ思は巳にたてりと雖ども、なほ、おぼ〳〵しき事のみ思し出づるも、わりなしや。其の後姉君の許に遣し文の返しに、よくも、生意氣らしく、我身を不幸とかこち給ふ物かな。學校に入らずば學ぶ能はざるか。と日一日と明けゆく君が代、師なく友なしとて、何ぞ都人を羨まん。數多の書あり、學ぶに難き事やある。勉めいそしませ給ひつやと、しば〳〵諫めらるゝ毎に、愚なる身の迷さめぬ。げにや、そらゆく月さへ、なほ滿つれば缺くる定ぞと、聞きつるものを、ふちせ常なき世の習、昨日立てし志も、今日ははや水泡と消ゆるもあるぞかし。まして、長き年月、また、如何なる事か起らざらん。いざ、今より心の駒に鞭うちて、なのめになりとも進まばやと思ふ心を、思しやりてか、月にむら雲花に嵐の例にもれず、月ははや雲間にかくろひて、只、何となうさびしきに、いそぎて、ふしどにいりぬ。

佐藤保子

初秋の頃は、秋もまた名のみにて、暑さは、夏よりも、なか〳〵に加はりぬ。げに折ふしのうつりかはりこそしるかりけりや。朝顔の花やゝほそり、撫子の色あせゆくも、綠の色はかはらぬ、桐の葉の落ちたる。又、をちこちには、虫の聲々打しきる、あさげは、朝露のしげく、草葉におくなど、皆、秋のしるしなりけり。雙が岡の法師が、取りあつめたる哀は、四秋のみぞ多かるべきと云へるも、げにさる事ぞかし。水の如く、空にすみて、窓をてらし虫の音は、夜の更けゆくまに、いよ〳〵高くなりぬれど、獨、

いれたくもなければ、油さしそへつ。何かぞ學び居るに、いつしかくさ〴〵の思ひいだされて、遂には、あはれをかんじきて、遂に我が身の上にも思ひゆきぬ。我が學に志し、故郷を出でしよりは、はや、二 の春秋をすごしぬるを、今のあたり、させる業をもなし得ず、いはゞ中有の空なり。かくして、いたづらに年月をおくり、むかひなば、頭に霜おく年にも、知らず〳〵の間になりなむ。かくては、いつのまに、父をなぐさめ、母をいたはらん。今宵も、父は、月のあかきに催され、我が身の上を思すらん。母も虫の鳴音にさそはれて、又、我が身のことを思すらん。あゝかくとたらつれの、居ます物を、其の御膝許をはなれ、朝な夕なの務めをも得せで、旅にさまよふは、かへすがへすも、くやしうなん。今よりは、一入はげみ、つとめんと思ひ續く。げにも〳〵、何につけても、ことに秋夜は哀れを感んじ、覺ふものかなと、くりかへしつゝ、打かこつけるに、さしもくまなき月影も、涙にくもりて、光なきさまなり。おりしも東の窓しらみ、風冷やかに、吹きいでゝ、身にしみぬれば、しばしさて、打眠るも、夢は、猶、おもひを離れざりけり。

徳永廣子

八月になりぬれば、秋もはやなかばになりぬ。都もひなも、ながめにこそちがひあれ、思ひはおなじ秋のもの月の光は、繪にもうつし得ぬばかりなるに、稻田は、一面にそよぎて、青海波をうちよせ、虫の音は、遠近にひまなく鳴わたり、いとあはれにもすゞしきけしきを、庭に立出て、影のやゝ高く立のぼるまで、ながめてありけるに、いろいろのおもひをなしぬ。さて、皇國を立出て海路はるけき、北京城の匪徒をうちたひらげて、旭の御旗を、外國にかゞやかし、陸海軍の武威を、しめしたまふものから、夜もすがら、露しげき野にふし、山に宿りて、かゝるけしきを、眺望しつる夜もありけん。いかに軍人たりとも、皇國ならぬ空なれば、ことのほか、すさましく感じつらんと、今夜のけしきの身にしみて、月は山のあなたに落ちかゝるまで、仰ぎ見て家に入るべきことをもわすれたりき。

佐々宥郷子

千載和歌集の秋歌に、大貳三位がよめる、「遙かなるもろこしまでもゆくものは秋のねざめの心なりけり」といふがいでたり。實にいじくも、よまれけるかな。今年は、支那の匪徒が、皇國の公使館をはじめ、各國の公使館舍にもおしよせて、暴行せしを、現津御神と大八洲知食天皇の、大御心もちて、陸軍海軍の將士兵卒を出軍せしめ、聯合軍の先鋒隊となしたまひぬ。千早振神代もきかぬ合戰にしもあれば、大日本男士が、武けき心を、振起しことを。外國新聞紙にも記して、稱揚せしに、八月の十五六日のころは、つひに、北京城の匪徒を。追ひはらひて、大御心のごとく、公使館の人々をたすけすくひ出しぬること のよしをまつぶさにききて、今宵のながきことをも。うちわすれ、文案によりそひゐて。なくなむ。

れもやらす秋の夜すからもろこしの
はるけきそらをおもひこそやれ

大谷津峯子

秋の夜こそ、殊に哀なれ。澄み渡る空、さしのぼる月のいとさやけきに。去年は、へだてもあらぬ友がきと、つま琴かきならし、歌よみかはし、などして、樂しみしを、其の後友は、秋の野分に誘はれて、桐の一葉と共に、果なくも、世を去られしより、袖の時雨の、たゆ間なかりしに、いつしか、年もすぎ行て、月は去年にかはられど、眺むるものは、己れ獨のみとなりぬ。あはれ、友は己れをふりすてゝ、など逝き給ひしと、恨みかこつも果

なしや。庭の面は、萩、きつかう、かるかや、女郎花、など、生ひひろごりて、咲きにほへる中に、露を命と頼みて、鳴くなる虫の音の哀さよ。こゑ行く月に、かり音の聞ゆるも、いとゞ身にしみて、尚、去年を忍び出らるゝこそわびしけれ。秋は、文よむに好き頃と、誰がいひけん言の葉思ひ出して、文机に向へば、又、我が身はなどかく怠りがちなるらん。月日は人を待たで、過ぎ行くものを、老いさらほへて、後悔ゆとも、何の益あらん。誠や、かゝる時にこそと、例の文とも、ひもとけど、やがて、くさ〱の思ひ、浮び來て、なか〱に、心もそゞろにます。折しも、更け行く夜半に、つまこふ鹿の聲、かすけく聞ゆるに、いとど、あはれのみましてなむ。

字高松子

虫の音、秋吹風もたゞならぬに、いとゞ故郷戀しくながむる空に、かりのつかれて鳴き渡りたる、さては、よもすがら淺茅の露とおきゐて、賤の女が打ちあかす砧のひゞきに、旅なる愛子のよさむをおもひやるなど、とり〱哀れに、かなしきものと秋の夜をいふめるも、さることとながら、やう〱夜ながくなり行くまゝに、いふせかりし蚊といふ虫も顔をかくし、窓におとづるゝ秋風冷やかに、書の卷もおのづから打ちひらかるゝ夕、燈火のもとに、見ぬ世の人と親み、あるは、蛍にも雪にもまして明けき月影に、心へだてぬ友とち打つどひて、物の道理をあげつらひなど、實に、樂しくも、又、うれしきは、秋の夜にこそとおもふも、げに、人のこころ〱なりや。

野中あさ子

虫のなくねにとりかこまれたる我が宿は、つゆふみ分けてとふ人もなく、庭のすゝきをなびかせる風の音さへ身にしみて、いとこゝろぼそきに、雲井はるかに、かりがねのなきわたり、おく白露は、さながら、玉をつらぬけるが如くにて、何事もあはれの種ならぬはなく、夜半に、ひとり、まどのもとに、文机によりて、古への文どもひもときつゝ、もし火のかげ、暗ければ、かきおこし〱、よみくだすに、世の女子どものふみゆくべき道のふし〱、いとこまかに、水くきのあとさへ、清らかにかきなされたり。かばかり、道とふ事をおもんじ給ひし聖人たちは、いかばかり行の正しかりけんと、おもひめぐらせば、此みをしへの、千分の一をもつくしゐぬ我身のほどの、いとはづかしさに、明日よりは、たゆみなしなど、例の明日とのみたのむ怠りのおろかさ。あはれ、古人の人の、ふみよむは、秋冬の頃にありとかいひおけるも、げにとうべなはれぬ。此よき時を、徒に過さば、老いての後悔のやちたびかひながらましと、何くれの事、おもひいづるも、いと堪へかたくてなむ。

霧中雁　　長澤いゑ子

とぶかりのすがたはきりにうつもれて
　ゆくゑをたゞぬこゑのみぞする

ゆめにうせにし母に逢ひてうれしさのあまりに　　高羽ふみ子

三のとしよりつもる思ひは有明の
　いかにかたらばつきやはつらん

今年は夏期の休業に豊後國の大分郡の湯平の温泉にものせんとて菊池の里を立出て馬にものらず十八里あまりの山路を歩行にて往來せし紀行のうちの歌ども。　　鶴田貞子

○斧嶽を越ねり

芹たけはあさかぜすずしこゑてゆく
　今日のたび路はいさごたのしき

○阿蘇山を見て
すゑさほく仰げばひろしかんながら
　阿蘇のたかれにたてるけふりを
千早ふるかみよながらにたちのぼる
　あそのたかれにけふりうづまく

○千丈牟田といふ所
ひらけゆく御代のしるしと千丈むた
　なかばはつゆのいな田とぞなる

○湯平雜詠
あしひきのやまのおくかの旅やかた
　なつてふものはあらじとぞ思ふ
かへるかとみればくる人たゑまなき
　さとのさかゐはみゆのしるしか
谷かはのこゑもたかれにすみわたる
　つきながれゆくなみのうへかな
今年は閏月もありといふ秋八月十五夜の月をみて
　德永萬壽子
秋ごとにかぞへてまちしもちつきは
　やまのはいづるかげのさやけさ
　德永廣子
よもすがらのきばをてらすもち月の
　ひかりにれやもさされざりけれ
　佐々有鄰子
木のめにろのきのけふりの末はれて
　あきのもなかのつきのさやけさ

そらはれて山のはいづるつきかげは
　こよひぞいさごさやけかりける
　城北純子
山家虫
　高砂き代子
山里に賤が刈りほす八千草の
　千草の中にこほろぎのなく
なりにふれて
桑つみてかへるさいそくたそかれて
　あはれを添ふる鈴虫のこゑ
野草花
花すゝき萩からあひ女郎花
　さきめく秋と野はなりにけり
列婦栗女の傳をよみて
よのために笑みてこほるゝ栄栗の
　わりなき中そゆかしかりける
孝心
西の海東の國のはてしなく
　おもふは親のめくみなりけり



女鑑歌文月次兼題

十一月五日　歌　奉祝天長節
　　　　　　文　菊をめつる詞

右十月廿二日〆切

十一月廿日　歌　水上落葉
　　　　　　文　豊年を祝する文（地方なる友に）

右十一月七日〆切

十二月五日　歌　殘菊
　　　　　　文　歳月不待人と云ふ題をよみて

右十一月廿二日〆切

十二月廿日　歌　往事如夢
　　　　　　文　家計日誌の末に記す

右十二月七日〆切

●女鑑月次兼題歌文投稿書式

歌書式

題
住所
姓名
…………

用紙は半紙半截の事。一題毎に用紙を別にし、一題には一人一首若しくは二首を限りとす。上の句の中に二音の漢字を一字入れ、其の他は悉く假名、若しくは一音の漢字にて認むべし。

文書式

題
住所
姓名
……、……。……

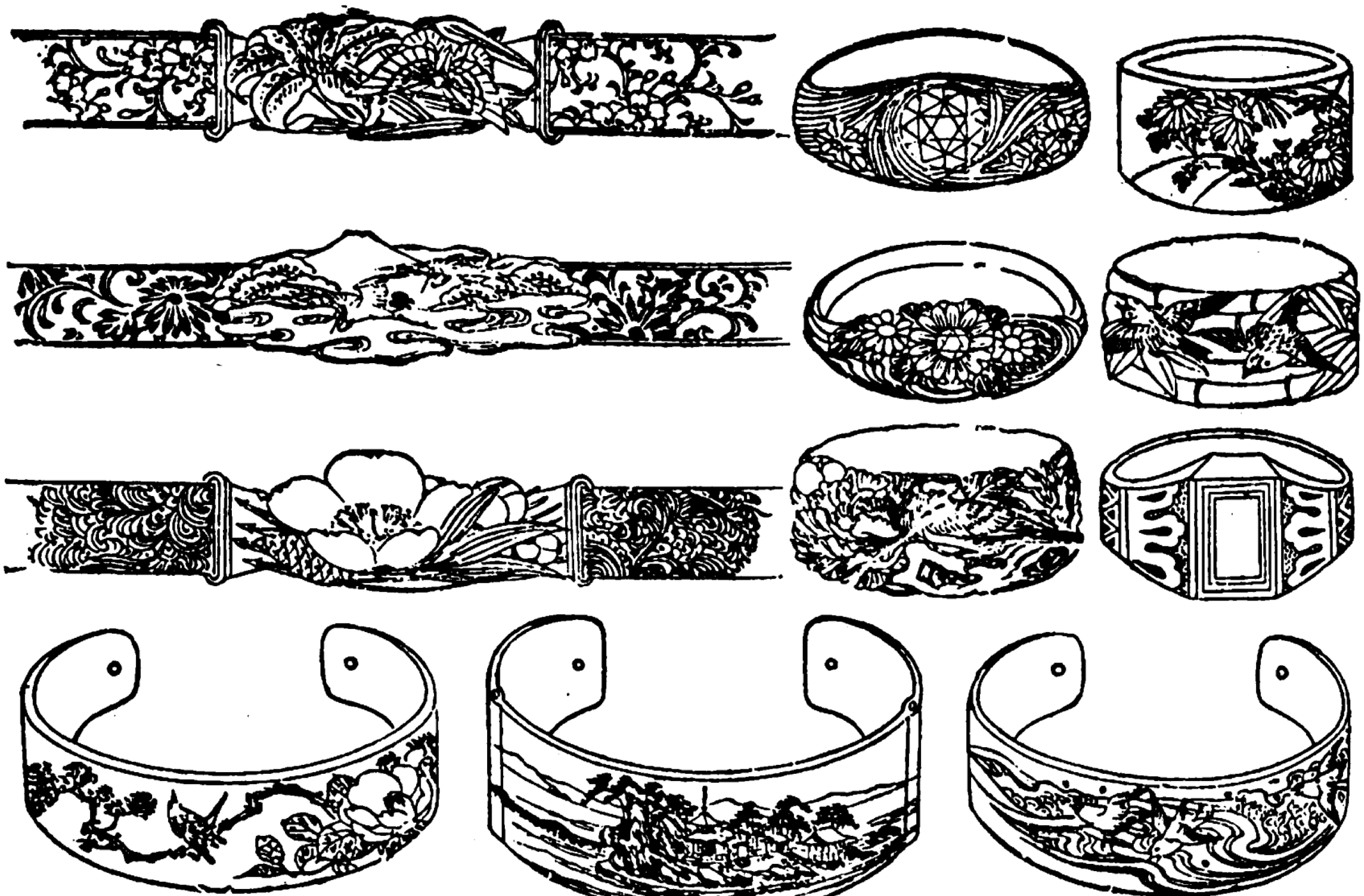
用紙は半紙二つ折の事。字體は鮮明に記し、且句讀點を施すべし。

○總て文字は分り易き樣、漢字は楷書、假名は普通の平假名にて個々に離して認むべし。

○總て書式に違ひたるは沒書とす。

○女子は、なにひとにても、隨意に投稿することを得。

吉沼製作品



金製指環

●十八金二匁五分付片切彫刻付
甲價 十六圓
乙價 十四圓

●廿金三匁付平象嵌片切彫刻付
甲價 廿二圓
乙價 十九圓

●廿金三匁付薄肉彫刻付
甲價 廿六圓
乙價 廿三圓

●廿二金三匁五分薄肉象嵌彫刻
甲價 卅四圓
乙價 廿九圓

●廿二金三匁五分厚肉彫刻
甲價 卅六圓
乙價 卅一圓

●廿二金三匁五分厚肉象嵌彫刻
甲價 卅八圓
乙價 卅三圓

●廿二金三匁五分肉彫象嵌ダイヤモンド入
甲價 二百五十圓
乙價 百八十圓
丙價 百三十圓
丁價 九十圓
戊價 六十五圓
巳價 五十圓

●廿金三匁付角小判形無地印面指環
十五圓七十錢

●廿二金四匁付角小判形無地印面指環
廿二圓四十錢

●純金五匁付角小判形無地印面指環
廿九圓五十錢

外ニ段付模様付形狀ノ離易ニ依リ價格ニ差アリ

金製帶止

●十八金製高彫繡珍綾織紐付
甲價 卅五圓
乙價 三十一圓
丙價 廿七圓
丁價 廿三圓
戊價 十九圓
巳價 十六圓

金製根掛

●十八金一匁五分付片切彫刻
甲價 十一圓
乙價 九圓三十錢

●廿金二匁付片切彫刻
甲價 十四圓五十錢
乙價 十二圓五十錢

●廿二金二匁五分片切彫刻
甲價 十九圓
乙價 十七圓

●十八金三匁付蝶番付三ッ折片切彫刻
甲價 廿圓
乙價 十七圓五十錢

●廿金三匁付蝶番付三ッ折平象嵌片切彫刻付
甲價 廿三圓
乙價 廿圓

◎印材製作篆刻
應貴囑

右の外金量の多少寶石の大小又は彫刻の繁簡精粗により代價に高低の品種々あり

時計及寶玉類貴金屬美術品商

東京市日本橋區通り二丁目

吉沼又右衛門

電話本局三十三番
長距離電話接續

社告　女鑑毎月五日、廿日、發行

定價	一冊　拾錢 六冊（三ヶ月分）　五拾五錢 十二冊（半年分）　壹圓 送料　全國無遞
代金	通貨又は郵便小爲替、銀行爲替及通運便にて御拂込の事 拂込は、郵便爲替、拂渡局は東京新富町郵便受取所、受取人は東京木挽町二丁目十二番地靜思館宛、郵券代用一割增
領收	別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若強ひて領收證を要せらるる方は別に證書郵送料又は端書封入の事
照會	編輯上に關する件は「東京市京橋區築地二丁目二十一番地國光社編輯部宛」◯會計上に關する件は東京京橋區木挽町二丁目十二番地靜思館宛照會は返信用切手封入若くは往復葉書にあらざれば回答せず◎未納税の來書は一切受取らず
廣告料	一行（五號活字廿三字詰）　金二拾五錢 半頁（一行三十詰）　金六圓 一頁（二段六十行）　金拾圓 料金は前納、位置は申込の順により組み込む

明治三十三年十月四日印刷
明治三十三年十月五日發行

編輯兼發行人　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　川崎直衞

印刷人　東京市京橋區南八丁堀一丁目十一番地　並木真雄

發行所　國光社

發賣元　東京京橋區木挽町二丁目十二番地　靜思館

女鑑

明治三十三年十月五日發行

毎月二回五日廿日發行　第二百拾四號

明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可

（東京市京橋區築地二丁目株式會社秀英舍印刷部印刷）